

歸ると、一時過ぎて居た。

其後梁川君の遺文寸光録が出た。彼の名がちよい／＼出て居る。彼の事を好く云ふてある。總じて人は自己の影を他人に見るものだ。梁川君が彼にうつした己が影に見惚れたのも無理はない。

梁川君が遺文の中、病中唯一度母君に對してや、苛厲の言を漏らしたと云つて、痛恨して居る。若し其れをだに白壁の微瑕と見るなら、其白壁の醇美は如何であらう。彼のような汚穢な心と獸的行の者は慙死しなければならぬ。

梁川君の計に接した其日井底に落ちた柄杓は、其の年の暮井浚への時上がつて來た。

然し彼は彼の生前に於て宇宙の那邊にか落したものがあつた。彼は彼の生涯を獻げ

て、天の上、地の下、火の中、水の中、糞土の中まで潜つても探し出ださねばならぬ。梁川君は端的に其求むるものを探し當て、堂々と凱旋し去つた。鈍根の彼はしば／＼捉へ得たと思ふては失ひ、攫んだと思ふては失ひ、今以て七轉八倒の笑止な歴史を繰り返へして居る。但一切のもの實は大能掌裡の筋斗翻に過ぎぬので人々皆通天の路あることを信するの一念は、彼が迷宮の流浪に於ける一の慰めである。

梅一輪

「お馨さんの梅が咲きましたよ」

斯く妻が呼ぶ聲に、彼は下駄を突っかけて、植木屋の庭の様に無暗に樹木を植ゑ込んだ園内を歩いて、若木の梅の下に立つた。成程咲いた、咲いた。青軸また緑萼と呼ばれる、種類の梅で、花はまだ三四輪、染めた様に緑な萼から白く膨らみ出た蕾の幾箇を添へて、春まだ浅い此の二月の寒を物ともせず、ばつちりと咲いて居る。極の雪の様にいさゝか青味を帯びた純白の葩、芳烈な其香。今更の様だが、梅は凛々しい氣もちの好い花だ。

白つばい堅縞の銘仙の羽織、紫紺のカシミヤの袴、足駄を穿いた娘が曾て此梅の



梅のつばい

下に立つて、一輪の花を摘んで黒い庇髪の鬢に挿した。お馨さん——其娘の名——
は其年の夏亞米利加に渡つて、翌年まだ此梅が咲かぬ内に米國で亡くなつた。

其れ以來、彼等は此梅を「お馨さんの梅」と呼ぶのである。

二

米國の畫家チャルチ、ヘンリー、バウトンの描いた「メエフラワアの歸り」と云ふ畫がある。メエフラワアは、約三百年前、信仰、生活の自由を享けん爲に、歐洲からはる／＼大西洋を越えて、亞米利加の新大陸に渡つた清教徒の一群ビルグリム、ファザアスが乗つた小さな帆前船である。畫は此船が任務を果してまた東へ歸り去る光景を描いた。海原の果には、最早小さく小さくなつた船が、陸から吹く追手風に帆を張つて船脚軽く東へ走つて居る。短い草が生えて、岩石の處々に起伏した濱にはビルグリムの男女の人々が、彼處に五六人、此處に二三人、往く船を遙に見送

つて居る。前景に立つ若い一對の男女は、傳説のジョン、アルデンとメーリー、チルトンで、もあらうか。二人共まだ二十代の立派な若い同士。男は白い幅濶の襟をつけた服を着て、ステツキをついた左の手に鏢廣のビユリタン帽を持つ右の手を重ね、女は雪白のエプロンをかけて、半頭巾を冠り、右の手は男の腕に縋り、半巾を持つた左の手をわが胸に當て、居る。二人の眼はちつと遠ざかり行くメエフラワア號の最後の影に注がれて居る。メエフラワアは故國との最後の連鎖である。メエフラワアの去ると共に故國の縁は切れるのである。なつかしい過去、舊世界、故國、歴史、一切の記念、其等との連鎖は、彼船脚の一步々々に切れて行くのである。彼等の胸は痛み、眼には涙が宿つて居るに違ひない。然しながら彼等は若い。彼等は新しい大陸に足を立て、居る。彼等の過去は、彼船と共に夢と消ゆる共、彼等の現在には荒寥であるとも、彼等は洋々たる未來を代表して居る。彼等は新世界のアダム、イヴである。

此の畫を見る毎に、彼はお馨さんと其戀人葛城勝郎を憶ひ出さぬことは無い。

三

葛城は九州の士の家の三男に生れた。海軍機關學校に居る頃から、彼は外川先生に私淑して基督を信じ、他の進級、出世、肉の快樂にあこがる、同窓青年の中にありて、彼は祈禱し、斷食し、讀書し、瞑想する青年であつた。日露戰爭に機關少尉として出陣した彼は、戰爭が終ると共に海軍を見限つて、哲學文學を以て身を立つる可く決心した。寡婦として彼を育て上げた彼の母、彼の姉、彼の二兄、家族の者は皆彼が海軍を見捨てることに反對した。唯一人滿腔の同情を彼に寄せた人があつた。其れは其頃彼の母の家に寄寓して居る女學生であつた。女學生の名はお馨さんと云つた。

お馨さんは、上總の九十九里の海の音が暴風の日には遠雷の様に聞ゆる或村の小

山の懐よところにある家の娘であつた。四人の兄、一人の姉、五人の妹を彼女は有つて居た。郷里の小學を終へて、出京して三輪田女學校を卒へ、更に英語を學ぶべく彼女はあゝる縁によつて葛城かつらぎの母の家に寄寓きやうして青山女學院に通つて居た。彼女も又外川先生の門弟で、日曜毎に隅の方に黙だまつて聖書の講義を聽いて居た。富裕ふゆうな家の女に生れて、彼女は社會主義に同情を有つて居た。葛城が軍艦から母の家に歸つて來る毎に、彼は彼女と談話だんわを交へた。信仰を同じくし、師を同じくし、同じ理想を趁おふ二人は多くの點に於て一致を見出した。彼女は若い海軍士官が軍籍を脱することについて家族總反對の中に唯一人の贊成者であつた。斯くて二人は自然に相思さうしの中となつた。二人は時に青山から玉川まで歩いて行く／＼語り、玉川の磧かはらの人無き所に跪ひざまづいて、流水の音を聞きつゝ、共に祈つた。身は雪の如く、心は火の如く、二人の戀は美しいものであつた。

四

本文の筆を執る彼は、明治三十九年の正月、逗子つしの父母の家で初めて葛城に會つた。恰も自家の生涯に一革命を閱くした時である。間もなく彼は上州の山に籠こもる。ついで露西亞に行く。外國から歸つた時は、葛城は已に海軍を退いて京都の大學に居た。

明治四十年の初春、此文の筆者は東京から野に移り住むだ。八重櫻も散り方になり、武藏野の雜木林が薄縁うすみどりに煙る頃、葛城は渡米の暇いとまひ乞ひに來た。一夜泊つて明くる日、村はづれで別れたが、中數日を置いて更に葛城を見送る可く彼は横濱に往つた。港外のモンゴリヤ號は已に錨いかりを抜かんとして、見送りに來た葛城の姉もお馨けいさんもとくに去り、葛城獨甲板の欄らんに倚よつて居た。時間が無いので匆々そそくに別を告げた。此時初めて葛城はお馨さんの事を云ふた。ゆく／＼世話にならうと思ふて居ると云ふ

た。而して今後度々上る様に云つて置いたから宜しく頼む、と云ふた。斯くて葛城は亞米利加に渡つた。

其年夏休前にお馨さんは初めて粕谷に來た。美しいと云ふ顔立では無いが、色白の、微塵色氣も鄙氣も無いすつきりした娘で、服装も質素であつた。其頃は女子英學塾に寄宿して居たが、後には外川先生の家に移つた。粕谷に遊びに往つたと云ふてやると、米國から大層喜んでよこす、と云つてよく遊びに來た。今日は學校から玉川遠足をしますから、私は此方へ上りました、と云つて朝飯前に來た事もあつた。體質極めて強健で、病氣と云ふものを知らぬと云つて居た。新宿から三里、大抵足駄をはいて歩いた。日がへりに往復することもあつた。彼女は女中も居ぬ家の自由を知つて居るので、來る時に何時も襷を袂に入れて來た。而して臺所の事、拭掃除、何くれとなく妻を手傳ふた。家の事情、學校の不平、前途の喜憂、何も打明けて語り、慰められて歸つた。妻は次第に彼女を妹の如く愛した。

葛城は新英州の大學で神學を修めて居た。歐米大陸の波瀾萬丈沸えかへる様な思潮に心魂を震蕩された葛城は、非常の動搖と而して苦悶を感じ、大服従のあと大自由に向つてあこがれた。彼が故國の情人に寄する手紙は、其心中の千波萬波を漲らして、一回は一回より激烈なるものとなつた。彼はイブセンを読む可く彼女に書き送つた。彼女を頭が固いと罵つたりした。而して彼女をも同じ波瀾に捲き込むべく努めた。斯等の手紙が初心な彼女を震駭憂悶せしめた状は、傍眼にも氣の毒であつた。彼女は從順にイブセンを読んだ。ツルゲーネフも讀んだ。然し彼女は葛城が墮落に向ひつゝあるものと考へた。何ともして葛城を救はねばならぬと身を藻掻いた。彼女は立つても居ても居られなくなつた。而して自身亞米利加に渡つて葛城を救はねばならぬと覺期した。

粕谷の夫妻は彼女を慰めて、葛城が此等の動搖は當に來る可き醜態で、少しも懸念す可きでない論した。然しお馨さんの渡米には、二念なく賛同した。彼葛城の

爲にも、彼女自身の鍛錬たんれんの爲にも、至極好い思立おもひたちと見たのである。彼女は葛城の渡米當時已に自身も渡米す可く身を悶もだえたが、父の反對によつて是非なく思ひ止まつたのであつた。

米國からは、あまり乗氣のりきでもないが、來るなら紐育ニューヨークブルックリンの看護婦學校に口があると知らして來た。彼女の師外川先生も、自身新英蘭ニューイングランドで一時白痴院はくちゐんの看護手をしたことがあると云ふて、彼女の渡米に賛同した。お馨けいさんは母の愛女であつた。母は愛女の爲に其望を遂げさすべく骨折る事を諾だくした。彼女の長兄は、其母を悦ばす可く陰に陽に骨折る事を妹に約した。残る所は彼女の父の承諾だけであつた。彼女の父は田舎の平相國清盛へいしやうくよしみとして、其小帝國內に猛威を振ふてゐる。彼女と葛城の縁談えんだんも、中に立つて色々骨折る人があつたが、彼女の父は斷じて許さなかつた。葛城の人物よりも其無資産むしぜんを慮おもんばかつたのである。葛城の母、兄姉も皆お馨さんの渡米には不賛成であつた。葛城の勉強の邪魔になると謂ふた。靜かにこゝで勉強

して葛城の歸朝を待てと勸めた。然しお馨さんは如何しても思ひ止まることが出来なかつた。それに、日本に愚圖ぐづ々々して居れば、心に染まぬ結婚を父に強しひられる恐れがあつた。

斯様な事情と彼女の切なる心情を見聞する粕谷の夫妻は、打捨て、置く譯わけに行かなかつた。葛城が家族の反對に關せず、何を措いても彼女の父の結婚及渡米の許諾を獲べく、單刀直入たんとうぢく桶狭間をりの本陣に斬込まねばならぬと考へた。

五

朧月おぼろづきの夜、葛城家の使者と偽いつはる彼は、房總線ほうそうせんの一驛で下りて、車に乗つてお馨けいさんの家に往つた。長い田舎町をぬけて、田圃たんぼ沿ひの街道を小一里も行つて、田中路を小山の中に入つて、其山ふところの行止ゆきどまりが其家であつた。大きな長屋門の傍の潜りくぐりを入つて、勝手口から名刺を出した。色の褪さめた黒紋付の羽織を着た素足すあしの大

きな六十爺さんが出て来た。お馨さんの父者人であつた。

其夜は烈しい風雨であつた。十二疊の座敷に寝かされた彼は、夢を結び得なかつた。明くる早々起きて雨戸をあけて見た。庭には大きな泉水を掘り、向ふの小山を其ま、庭にして、蘇鐵を植ゑたり、石段を登むだり、石燈籠を据ゑたりしてある。下駄突かけて、裏の方に廻つて見ると、小山の裾を鬼の窟の如く刳りぬいた物置がある。家は茅葺ながら岩疊な構へで、一切の模様が岩倉と云ふ其姓にふさはしい。まだ可なり吹き降りの中を、お馨さんによく似た十四五、十一二の少女が、片手に足駄を提げ、頭から肩掛をかぶり、跣足で小學校に出かけて行く。座敷に歸つて、晝の光であらためて主翁と對面した。住居にふさはしい岩疊なかつぶくである。左の目が眇かと思ふたら、其れは眼の皮がたるんでゐるのであつた。其れが一見人を馬鹿にした様に見える。芳野金陵の門人で、漢學の素養がある。其父なる人は、灌漑用の瀦水池を設けて、四邊に恩澤を施して居る。お馨さんの父者人は、十六にし

て父に死なれ、一代にして巨萬の富をなした。六十爺の今日も、名ある博士の辯護士などを顧問に、萬事自身で切つて廻はして居る。此邊は數名の博士、數十名の學士を出して居る位で、此富豪翁も子女の教育には餘程身を入れて居るのであつた。

障子に日がさして來た。障子を明けると、青空に映る花ざかりの大きな白木蓮が、夜來の風雨に落花狼藉、滿庭雪を舖いて居る。推參の客は主翁に對して久しぶりに嘘と云ふものを吐いた。彼は葛城家の使者だと云ふた。お馨さんを將來葛城勝郎の妻に呉れと云ふた。旅費學資は一切葛城家から出すによつて、お馨さんを米國へ遣つてくれと云ふた。學校は師範學校見た様なもので、育兒衛生を旨とすると云ふた。主翁は逐一聞いた上で、煙管をボンと灰吹にはたき、十二三の召使の男兒を呼んで御寮様に一寸御出と云へ、と命じた。やがてお馨さんの母者人が出て來た。よくお馨さんに肖て居る。十一人の子供を育て、恐ろしい吾儘者の良人に仕へて、しつかり家を壓へて行く婦人の尋常の婦人であるまいと云ふ事は、葛城家の僞使者も久し

く想ふ處であつた。主翁は今一應先刻の御話をと云ふた。似而非使者は、試験さるゝ學生の如く、眞赤な嘘を眞顔で繰り返へした。母者人は顔の筋一つ動かさず聽いて居た。主翁は兎も角忤や親戚の者共とも相談の上追つて御返事すると云ふた。「六ヶ敷いな」彼は斯く思ひつゝ、歸途に就いた。

然しながら天はお馨さんに味方するかと思はれた。彼女の父は意外にも承諾を與へた。旅券も手に入つた。而して葛城が米國へ向け乗船した二年と三月目の明治四十二年の七月六日、横濱出帆の信濃丸で米國に向ふた。葛城の姉、お馨さんの長兄夫婦、末の兄、お馨さんによく肖た妹達は、棧橋でお馨さんを見送つた。粕谷の夫妻も見送り人の中にあつた。妹達は涙を流して居た。水草の裾模様をつけた空色緞のお馨さんは、同行の若い婦人と信濃丸の甲板から笑みて一同を見て居た。彼女は涙を墮し得なかつた。其心はとく米國に飛んで居るのであつた。船はやをら棧橋を離れた。空色衣の笑貌の花嫁は、白い手巾を振り／＼視界の外に消えた。

六

乗船いたしましたから五日目になりますが、幸に海は非常に静かです……友人と同室で御座いますから心配もなく、朝より夕まで笑ひつゞけて居る次第にて、非常に幸福で愉快に暮して居ります。互に語り、讀書し、議論し、歌を唱ひ、少しも淋しき事はなく暮して居ります。非常に元氣なる故、隣室よりうらやましがられて居る程で御座います。……然し葛城は下等で荷物同様な取扱ひをされて非常に苦しむで参りましたのに、私は上等室にて御客様扱ひを受けて安樂に暮らして居りますから濟まぬやうな申譯なきやうな心地がいたして居ります。

七月十日

信濃丸にて

馨 子

愛する御姉君に参らす

* * * * *
去廿一日午後無事シャトルに上陸いたしましたから、御安心下さいませ、……明日朝九時發の汽車でニューヨークに参ります。

七月廿四日夜

シャトルにて

馨子

姉 上 様

* * * * *
昨日ニューヨークに着いたし、漸く目的の地に達し得候ま、誠にうれしく存じ居り候。……葛城よりもよろしく、非常によるこび居り候。

七月卅一日

ニューヨークにて

馨子

姉 上 様

* * * * *
身の平和、心の喜、筆にも言葉にも盡されず候。

勝 郎

あまりのうれしさに、今の米國は天國に候。

八月三日

馨子

ニューヨークにて

* * * * *
前略、無事にニューヨークに着きました。ニューヨークの停車場から獨りで學校へ行く積りで居りましたら、思ひもかけず葛城が迎へに来て居りました。手紙では随分強い事を申してよこしましたが、来て見れば非常によるこむで、よく來たと申して居ります。

前月の十日に病院に参りまして、直ぐ其日から働きました。慣れぬ業と言葉が始

めは聞き取れぬので實に困りましたが、だん／＼と慣れてよくなりました。實に病院の仕事はハードで御座います。

朝の七時から夜の七時までには腰も掛る事が出来ず、始終立つて居りますから、足が痛くて／＼實に初めは困りました。然し一日の内二時間は休めますから、一日の働時間は十時間で御座います。身體の工合のよき時はともかく、悪しき時は實にいやになります。慣れぬ仕事の上に一日立ちきりで御座いますから、身體の工合が妙になりました、種々な變動を起しますが、慣れ、ばよろしくなるとの事で御座います。

私は今は外科室の患者が四十人ばかり居る室で働いて居ります。随分ひどい重傷の人も居ります。脊骨を挫いた人が三人程に、火傷の人や、三階や二階から落ちた人や、盲腸炎の人や、なか／＼種々な種類の患者が居ります。脊骨が折れても餘病さへ起さねば大丈夫で御座います。一人は肺炎を起して死に

ましたが、後の二人は丈夫で居りますが、然し實に痛たそうで随分氣の毒で御座います。初めは手術室から歸つて來た患者の側に居つて看護をいたします事が一番恐ろしく、殊に睡眠剤の臭が鼻について自分が心地が悪くなりましたが、近頃は慣れて平氣になりました。それからどんないやな恐ろしい事でも、自分がせねばならぬと思ひますれば、何でも出来ます。未だ初めで御座いまして、ベッドを作る事や、病人の敷布をかへる事や、器械を煮て消毒する事や、床すれの出来ぬやうに患者の脊をアルコールで擦る事や、氷嚢やら湯嚢やらをあて、やつたり、呑物を作つて與へましたり、何やかやと、一日を忙はしく、足は棒のやうになりました。七時に室に歸つて參りましても、疲れて起きて居る事が出来ません程で御座います。

朝は六時に起きまして、六時半に食堂に參りますが、初めは慣れぬし、三十分間に顔を洗ひ髪を結び制服を着、また床をなほす事が出来ませんでした。今では

出來得るやうになりました。慣れ、ば十五分位でも出來得るやうになるさうで御座います。見ないで後のボタンを掛けるのがむづかしく、出來ないで始めはわかりましたが、いつの間にか慣れて來ました。

晝は忙しいのと、夜は疲れますので、ついでに氣不調法にもなりました、皆様に御無沙汰を申上て居ります。然し夢はなつかしき千歳村の御宅の様子や、また私の母や妹の事など夢みます。いつも夢では日本に居ります。未だ此の地に參りましてから西洋の夢は見ません。

年來聞き及びました理想を實際に行ふ事が出來まして、實に愉快に思ひます。患者は米國人も居れば、獨乙人、伊太利人、ギリク人、黒色人、實にあらゆる人を交へて居ります。初めは何だか異人のやうな氣がして妙でしたが、今は平氣になりました、黒人でも誰でも自分の同胞の如く思はれ、出來得るだけ親切に世話してやりたいと務めて居ります。初めは患者の方でも妙に思ふたらしう御座いま

したが、近頃ではよくなづいて、随分よくおとなしくして居てくれますし、病人の方から親切に語をかけてくれますやうになりました。

校長もよろしい御方で、親切にして居て下さいます。私も日本に居りました時は、丈夫でゐりましたが、ニューヨークに參りましてから餘り丈夫ではなく、風土やら食物やら萬事が變つた故で御座いませう、昨日からも少し工合が悪しく寢て居りましたら、校長も度々見舞に來て呉れますし、なか／＼手厚き看護して呉れますから、感謝いたして居ります。今日は午後から病院の働きに出やうと思ひましたが、校長から許しが出ませんから、病院に參りませんで、床の上に座つて先日から書きかけました御手紙を書きつけました。

葛城は明年ユニオンを卒業いたしますから、出ましたら直ぐ獨乙へ行つて二年程居つて、それから直ぐ日本へ歸りたいと申して居ります。私は身體のつゞく限りは病院に居りたいと思ふて居ります。出來るなら卒業をしたいと思ひますが、卒

業せぬでもかまいませんが、とにかく半年居つてもためになると思ひます。……葛城も本月の三日頃からとう／＼働きに参りました。随分やはり骨が折れるさうで、氣の毒に思ひますが、少しは働いて見た方がよろしいと思ひます。……前には手紙を書いてから見るまでは一月もかゝりましたが、今は四時間程たてば手紙は参りますし一時間かゝればニューヨークにも行かれます、一週間に一度は多分逢へますから、幸福に思ふて居ります。私は是非とも三四年は米國に居りたく思ふて居ります、今の處では。

葛城は米國嫌ひで、來年になつたら直ぐ獨乙へ行くと申して居ります。私も獨乙行を勧めて居ります。是非行くやうにと望んで居ります。

ニューヨークへ行きますには、地下の電車でも、亦エレベーターでもどちらでも取つて参れます。私は近頃はニューヨークに獨りで参れるやうになりました。……御蔭様にて只今は満足して感謝して働いて居ります。少しも日本に未だ歸りたく

思ひません。永く米國に居りたく思ひます。米國に参りまして氣が清々となりました。葛城が居りますから、何かと心強う御座います。然し手足まとひにならぬやう世話にならぬやうには充分致して居ります。末筆ながら鶴子様にはどんなに御可愛らしくいらつしやいましょう。鶴子様位の御子様を見ます度に思ひ出されます。毎朝小兒科の方に三つ四つの床を作りに参りますが、此の頃では子供も慣れて言葉をかけ、また私が歸ります時にはグールドパイと皆口々に可愛い、聲で叫んでくれますから、可愛くて堪らなくなります。可愛い、子供も赤兒も澤山居ります。どうか御姉上様にも御丈夫でいらつして下さいませ。

九月八日

ブルックリン病院にて

馨 子

御なつかしき

御姉上様

御まへに

身體の工合が悪いと申しましたが、大した事は御座いません。殊に病院で御座いますから、病氣の心配は少しも御座いませんから、御安心下さいませ。

もはや秋となりました。故郷を思ひ出す時は、第一に粕谷の御家をなづかしく思ひ出します。

去る八日、校長より學生として他の見習ひの生徒と共に受け入れられ、今はキャブも貰ひ受け、眞の看護婦になりました。無事に二ヶ月の苦しい見習ひの時代は終りましたから、御安心下さいませ。

十月十二日

ブルックリン病院にて

馨 子

姉 上 様

御はがきと御寫眞、夢ではないかとあやしむ程うれしく御なづかしく拜見いたしました。……相かはらず働きが激しいので、私のやうな者には、身體がとても續かぬと思ひましたから止めやうと思ひましたが、然し倒れる迄は病院に居る積りで居ります。只信仰をもつて神の助けによつて日々の務をいたして居ります。

十月廿四日

ブルックリン病院にて

馨 子

姉 上 様

十一月三日、今日は天長節で御座いますが、私に取つては何の變りもなく今日も一日働きました。然しなづかしく故郷の事が今日は一しほ戀しくなづかしく思われます。其後は如何御過し遊ばされますか。いつも御なづかしく、先日御送り下

さいました御寫眞を眺めては自分の弱さを勵まして居ります。私は其後變りもなく自分の天職と信じて従事いたして居りますから、御安心下さいませ。先づ御なづかしきまゝに一寸御伺ひいたしました。

十一月三日

ブルツクリンにて

馨 子

姉 上 様

目出度きクリスマスを遙かに御祝ひ申上ます。

此のエハガキにある可愛い子供は誰で御座いましやうか。鶴ちゃんでは御座いませんでしやうか。あまりよく似て居りますもの。とにかく此の兒はクリスマスを是非千歳村のなづかしい御家で迎へたいと申します。大急ぎで今出立いたさせますから、よろしく御願ひ申します。

一千九百〇九年基督降誕になりて

ブルツクリンにて

馨 子

御姉上様に

七

明治四十三年二月三日、粕谷草堂の一家が午餐の卓について居ると、一通の電報が来た。お馨さんの兄者人からである。眼を通した主人は思はず叫と叫んだ。

馨急病にて死せりと

妻は聲を立て、哭いた。

主人は直ちに葛城の母と長兄を訪ねた。彼は面目ない心地がした。若し死が人生の最大不幸なら、お馨さんの渡米を沮んだ彼人々は先見の明があつたのである。彼は其足で更にお馨さんの父母を訪ふことにした。銀座で手土産の浅草海苔を買つた

ら、生憎「御結納一式調進仕候」の札が眼につく。昨年こぞの春頼まれもせぬ葛城家の使者としてお馨さんの實家に約婚の許諾を獲に往つた彼は、一年もたぬに此様な用事で二たび其家を訪はうとは思はなかつた。

終列車は千葉までしか行かなかつた。彼は千葉に泊つて、翌朝房總線の一番に乗つた。停車場に下りると、お馨さんの兄さんが待つて居た。兄さんは赤い紙に書いた葛城から來た電文を見せた。

馨子急病昨夜世を去る

とある。兄さんはまた、父は非常に興奮して、終夜酒を飲み明かし、母や私に出て行けと申しますと云つた。

岩倉家の玄關で車を下りると、お馨さんの阿爺が出て來た。座に請せられて、一つ二つ淀みがちな挨拶をすると、阿爺さんが突然わアツと聲を立て、哭いた。少し話してまた聲を放つて哭いた。やがて阿母が出て來た。沈着な阿母も、挨拶半に顔

が劇しく痙攣して、涙と共に聲を呑んだ。彼は人の子を殺した苛責を劇しく身に受け、唯黙つて辭儀ばかりした。

やがて酒が出た。彼は平生一滴も飲まぬが、今日はせめてもの事に阿爺阿母と盃の取りやりをしるしばかりした。岩倉家では丁度十四になる末から三番目の女を、阿母の實家にやる約束をして、其祝ひをして居る所にお馨さんの計報が届いたのださうだ。丁度お馨さんが米國で亡くなつた其晩に、阿母さんが玄關の式臺に靴の響を聞きつけ、はッとして出て見たら誰も居なかつたさうである。魂の彼女は其時早く太平洋を渡つて歸つて來たのであつた。

彼はお馨さんの兄さんと共に葛城家へ往つてあとの相談をすることにした。阿爺さんは是非新築中の別荘を見て呉れと云つて、草履をつツかけて案内に立つた。酒ぶとりした六十翁の、溝を刎ね越え、阪を駆け上る元氣は、心の苦から逃れやうとする犠牲のものがきの様で、彼の心を傷ませた。やがて別荘に來た。其は街道の近く

にある田圃の中の孤丘を削つて其上に建てられた別荘で、質素な然し堅牢なものであつた。西には富士も望まれた。南には九十九里の海——太平洋の一片が淺黄リボンの様に見える。お馨さんは去年此處の海を犬吠ヶ崎の方へ上つて米國に渡つたのである。「如何です、海が見えませう。馨が見えるかも知れん」と主翁が云ふ。廣々とした座敷を指して、「葛城さんが歸つて來たら、此處で祝言させようと思つて居ました」と主翁がまた云ふ。

彼は一々胸に釘うたる、思であつた。

八

お馨さん死去の電報に接して二週間目の二月十六日、午餐の席に郵便が來た。彼此と撰り分けて居た妻は、「あらッ、お馨さんが」と情けない聲を立てた。其はお馨さんが亡くなる二週間餘り前のはがきであつた。

新年をことほぎ參らせ候。

御正月になりましたら、精い御手紙を認めたと思ふて思ふて居りましたが、御正月も元旦からいつもと同じに働いて休みなどは取れませんでしたから、ついつい御無沙汰いたしました。随分久しく御無沙汰申上しました。御許様御家内皆様には御變りも御座いませんか。私はいつもながら達者で、毎日／＼働いて居ります。其後は何の變りもなく無事に病院で勤めて居ります。知らぬ内に種々の事を覚えて行きます。

御正月にはホームシックにかゝりまして實に淋しく、毎日千歳村のなつかしい御家族の御寫眞のみ眺めて居りました。私は只神の御助けと御導きにより只神の御保護を信じて其日を暮して居ります。いづれ後より精しく申上します。御なづかしきまゝに一寸申上しました。

一月十三日

米國ブルックリンにて

彼世からのたよりが又一つ来た。其はお馨さんが臨終十一日前の手紙であつた。クリスマスと新年の祝ひも、いつしか過ぎ去りまして、はや今日は二十日正月となりまして。

昨年きねんの御正月には、御なづかしき御家に上りまして、御難煮おせふにの御祝ひに預りました。今でも實に何ともかとも申されぬなづかしきその時の光景ありさまを追懐つみくわいいたしません。實に月日の過ぎ行くのは早いもので御座いまして、もはや當地に参りましたから年の半分は立ちました。此様ごんなですから、また御目にかゝる事の出来得る日は近きにある事と思ひます。

次に私事は相かはらず此病院で働いて居ります。三ヶ月程前から忙せはしき婦人の病室の方へ参りましたもので、夜になつて室に歸りまして、筆を取る勇氣もな

く過しましたが、二三日前から前に居ゐつた病室に歸りましたので、非常に樂らくになりました。

三ヶ月間は實に苦しい思ひをいたしました。然し實によい經驗を得ました。私は日本の看護婦のトレーニングにつきましては、どんなか少しも知りませんが、米國のトレーニング、スクールは、たしかに日本よりは勝まさつて居ると思ひます。随分軍隊と同じやうな組織で、きびしう御座います。實にある點は高尚で完全ですが、またある點は劣おとつて居る處もありますやう思はれます。日本に居りました時とすつかり何から何まで變つて居りまして、働いた事とて別に朝から夕までつゞけた事ありませんで、生活が全く異つて居りますから、實に苦しく感じました。

近頃は朝から夕まで一度も腰もかけなくとも平氣で働いて居ります。然し三ヶ月の間は、實に困りまして、幾度も止めやうかと思ひましたが、とう／＼つゞけま

した。仕事が苦しいばかりでなく、上のヘッドの看護婦が餘り人物の人でないもので、下の私共は實に辛く思ひました。實に忙しいと申しましたら、あのやうな思ひは實に／＼初めてと御座います。若し日本に居つてならば、とても私には勤まりません。此處ではいや應なしですから、とにかく務めて居ります。私は卒業はするかしないか、私はどうしてもいやになれば明日にも止める積りで居ります、たゞ葛城が米國に居ります間は、厄介をかけるのが氣の毒ですから、どうか續けたく思ひます。

友人の中にも、なか／＼よい家庭に育つて性質のよい人もありますが、また意地の悪い人もあります。やはり面も性質も日本人と同じで御座います。人類ですから、やはり皆人情は同じで御座います。

私は自分のベストを盡して居ります。親切と正直とを旨として居ります。病人もよくなつて呉れますし、自分の受持の病人には満足を與へる事が出来ましたか

ら、此れは自分の第一の寶と思ふてよろこんで居ります。家に歸る時は、皆よろこんで感謝して歸りますから、是れが私の楽しみで御座いました。

婦人の病室に居りました時は、何から何まで一切世話をせねばなりませんし、中には老人で不隨の人もありますから、床ずれの出來ぬやうにそれ／＼手あてもせねばなりませんし、何ともかとも申されぬ程忙はしう御座います。大抵十二人位の人の世話を一人でいたしますし、また他の病室の病人の事も世話をせねばなりませんから、實に苦しう御座います。

看護法の實例などは、校長が一々生徒を集めて教へて呉れます。また今は醫師が解剖と生理など講じて居ります。昨年はバクテリアについて講義もききました。また校長が自ら看護法など學術的に教へて居ります。講義なども、學術の名は私には知りませんが、なか／＼むづかしいですが、またこちらの人もあまりよくは知りませんが、共に勉強して居ります。むづかしいですが、少しは興味が御座

います。看護婦は醫學の事も知らねばなりませんから、餘程勉強せねばなりません。一日一日と少しづつ、何かと覚えて参りますから、有り難く思ふて居ります。初めての米國にてのクリスマス、餘り楽しくも御座いませんでしたが、然しクリスマスの際は、此處でもなか／＼にぎやかで御座いました。當日は四時間暇が取れました。クリスマスデイナーも御座いまして、なか／＼盛んで御座います。皆々上機嫌で、うれしさうで御座います。

學校でもクリスマスにはクリスマスダンスが御座いました。私は生れて初めての舞踏會と云ふものを見ました。實に優美なもので御座います。夜の八時頃から翌朝の二時か三時まで踊つて居ります。元氣のよいのには、おどろきました。私は夜會服のかはりに日本服を久々で着ました。皆々非常によろこむでくれました。

御正月には休みもなく、元日から常と同じに働きしました。御正月には何となく故

郷がなづかしく、さびしくつて堪りませんでした。毎日／＼忙はしく働いて居りますから、常にはホームシックも起りませんが、半日暇の時などは、實にさびしくて堪らぬ事があります。餘り私は外出はいたしません。少なくとも一週間に一度は出て、外の變つた空氣をすはねばならぬと知りつゝも、疲れるのがいやなので、つい／＼出ません。當地の人は皆元氣です。夜十二時に歸つても、翌日はやはり同じに務めます。學校では、一週に一度は十二時までの許しを貰へますし、三度は十一時までの許を貰へますし、常には十時までは何處に行つてもかまはぬやうになつて居ります。此處は感心で御座います。此の様に自由でも少しも亂れません。日本の女學校などには、見やうと思ふても見られぬ處で御座いましやう。私は今は自分で働いて自分で生活して居りますから、日本に居つた時よりも、苦しみながらも、或一種の愉快が御座います。

葛城はユニオンの方も卒業に近づきました。早いもので、三年も東の間に過ぎ去

りました。いつも私共は御なづかしき御兩人様の御噂のみいたして居ります。千歳村、實になづかしく思ひます。

大抵二週間に一度は、逢ひます。前から私はニューヨークには獨りで參れますから、半日暇を取れる時は、二週に一度は參ります。

當地は實に寒さはきびしう御座いまして、雪は度々降りますが、家の中の寒防はよく備はつて居りますから、家の中の温度は、春のやうな氣候で御座います。私はシモヤケは毎年出來ましたが、今年は冷い思ひなどは少しもいたしませんから、手はきれいで、少しも出來ませんから御安心下さいませ。日本に居りました時は、シモヤケには困りました。外は随分寒く、身を切らる、様で御座います。

雪が降りますと、なか／＼溶けませんで、幾日も／＼つもつて居ります。

今日も雪模様ですから、午後から降るかもわかりません。

書きたい事は山々御座いますが、また次の便りの時にいたします。

亂筆を御許し下さいませ。日本語を此の頃は話しませんし、只葛城と日本語で話すものですから、亂暴な語ばかり習ひまして、いつも餘り無禮の語をつかつて驚く事が御座います。何卒亂筆亂文御許し下さいませ。

先は御無沙汰御詫びかた／＼御機嫌御伺ひまで。

一月廿日

岩倉 けい

御なづかしき

御姉 上様

御まへに

此れがお馨さんの粕谷に寄せた最後の心の波であつた。此手紙を書いて十一日目に、彼女は其最後の戦場なる米國ブルックリン病院看護婦學校の病室に二十四年の生涯を終へたのである。

お馨さんは死んだ。

新生涯の新夫婦、メエフラワアを目送するピユリタンの若い男女の一對の其一人は缺けた。残る一人は如何であらう？

一月卅一日午後七時半、最愛の我が馨子高貴なる人生の戦に戦ひ死す。忠信なりし彼の女は、死に至る迄忠信なりき。病は敗血症と腸炎の併發、事極めて意外、病勢は急轉直下、僅かに二十時間にして彼女は去る。

盛大なりし葬式(ユニオン神學校に於ける)は、彼女と予とを永しへに結ばん爲めの結婚の式なりき。多く言はず、唯察し玉へ。

二月三日

勝 郎

408

「日蓮は泣かねど、涙隙無し」と。涙隙無きに止まらず、聲を擧げて泣ける事も幾たびぞ。怨み、嘆き、悲しみ、悔い、悩み、如何にして此幽闇の力破らんと、空しくあたり見廻はせるも幾たび。……幾度我れ死せば此の苦しみあらざりしもの

のをと思ひ候。

されど若し弟先んせば、馨子の悲痛は弟にも勝りて激しかりしならむか。弟をして此の憂闇の力を破り得しむるものは、唯一つ馨子生きて之れが爲に戦ひ、死に及んで止まざりし我等の理想也。彼女の短かき生涯は、その一切の瑕瑾と不全を以てして、遂に人生最高の理想を追ひ、之れが爲めに戦ひ、戦ひ半ばならずして斃れし英雄の生涯也。遂に蜉蝣の如き人生は、生きて甲斐なけん。昔者ブラトー、ソクラテスの口をして曰はしめて曰く、*“It is not mere life, but a good life that we court.”*と。假令馨子凱歌の中に光榮の桂冠戴くを得ざりしにせよ、彼女の生はその畢生の高貴なる焰のあらん限を盡して戦ひ、戦の途上戦ひ死せる光榮ある戦死者の生也。此の事、弟をして敬虔馨子の死の前にぬかづき、無限のインスピレーションを茲に汲ましむ。

二月十八日

勝 郎

409

五月の初、お馨さんが髪と骨になつて日本に歸つて來た。お馨さんのカタミを連れ歸つたのは、日本に歸化した米國の女宣教師で、彼女は横須賀に永住して海軍々人の間に傳道し、葛城も久しく世話になつて「母」と呼んで居た人で、お馨さんの病死の時は折よく紐育に居合はせ、始終萬事の世話をしたのであつた。

五月の四日、粕谷草堂の夫妻は鶴子を連れて、お馨さんの郷里に於ける葬式に列なるべく出かけた。兩國の停車場で、彼等は古びた中折帽を阿彌陀にかぶつた、咽喉に汚れた絹ハンカチを卷いた、金齒の光つて眼の鋭い、癩癩持らしい顔をした外川先生と、強情でかぬ氣らしい、日本人の彼等よりも却てヨリ好き日本語をつかふF女史に會つた。

いつもの停車場で下りて、一同は車をつらねて彼丘の上の別荘に往つて憩ひ、そ

れから本宅に往つた。お馨さんの父者人、母者人と三度目の對面をした。十二疊二間を打ぬいて、正面の床に遺髪と骨を納めた箱を安置し、昨日から來て葛城の姉さんが亡き義妹の爲に作つた花環をかざり、また藤なぞ生けてあつた。お馨さんは自身の寫眞と云ふ寫眞を残らず破り棄てたそうで、目に見るべき其姿は残つて居なかつた。然しお馨さんによく肖た妹達が五人まで居て、其幼な立から二十歳前後を眼の前に見る様であつた。外川先生が司會し、お馨さんの學友がオルガンを弾いて、一同讚美歌の「や、にうつり行く夕日かげの、残るわがいのち、いまか消ゆらん。御使よ、つばさをのべ、とこしへのふるさとに、つれゆきてよ、……」と云ふのを歌ふた。

粕谷の彼は起つてお馨さんと彼等の干繫を簡單に述べ、父者人に對して卑怯なる虚言の罪を謝し、終に臨み、お馨さんの早世はまことに残念だが、自身の妹か娘があるならば、十人は十人矢張お馨さんの様に戰場に送りたと思ふと言つた。

次にF女史が立つて、お馨さんの臨終前後の事を述べた。お馨さんは、ブルックリン病院の生徒となつて以來、忠實に職分を盡して、校長はじめ先輩、同僚、患者、すべての人の信愛を贏ち得た。發病以來苦痛も中々あつたであらうが、一言も不平憂悶の語なく、何をしてもらつても「有難う〜」と心から感謝し、信仰と感謝を以て此世を去つた。眞に見上げた臨終で、校長はじめ一人として其美しい勇ましい臨終に感激せぬ者は無かつた。F女史は斯く事細かに語り來つて「私も斯様に米國から御國に傳道に參つて居りますが、馨子さんの働きの見れば、其働きの間は實に暫の間でございましたが、私は恥入る様に思ひます。馨子さんは實にやさしい方で、其上男も及ばぬ凛々しい魂を持つてお出でした。春の初に咲く梅の花の様な方でした」と云ふた。

言下に、粕谷の彼は、彼の園内の梅の下に立ち白い花を折つて黒髪に挿すお馨さんの姿をまざまざと眼の前に見た。本當に彼女は人になつた梅の花であつた。だから

ら其花を折つて簪にしたのだ。彼女にして初めて梅の花を簪にすることが出来る。彼は重ねて思ふた。米國からF女史が歸化して、日本に傳道に來る。日本からお馨さんが米國に往つて米國の人達に敬愛されて死ぬる。斯うして日米の間は自然に繋がれる。お馨さんは常に日米感情の齟齬を憂へて居る女であつた。日米の親和を熱心に祈つて居た女であつた。其祈は聽かれて、彼女は米國に死んだ。米國の灰になり米國の土になつた彼女は、眞に日本が米國に遣はした無位無官の本當の平和の使者の一人であつたと。蓋「實の在る所心もまた在る」道理で、お馨さんを愛する程の人は、お馨さんの死んだ米國を懷はずには居られないのである。

最後に外川先生が師弟の關係を述べ、「彼女は強い女であつたが、體は強健だし、貧乏はしないし、思ひやりと云ふものが或は缺ける恐れがあつた。だから自分は米國渡航を賛成したのであつた。自分は考へた、彼女が二三年も米國に揉まれると、實にエライ女になつて來る。然るに今Fさんの言を聞けば、彼女は短かい期間であ

つたが立派に其人格を完成することが出来た。だから死んだのである」と云ふた。
外川先生の祈禱で式は終へた。一同記念の撮影をして、それから遺髪と遺骨を岩
倉家の菩提寺の妙樂寺に送つた。寺は小山の中腹にある。本堂の背後、一段高い墓
地の大きな海棠の下に、

岩倉馨子之墓

と云ふ小さな墓標が立てられた。

葛城は其後間もなく獨逸に渡つた。

千九百十年 六月十八日

本日午後三時當地出帆。

ニューヨーク

三年苦戦健闘のアメリカを去らむとして感慨強し。闘争は一個微弱なる一少年を
化して、兎も角も男を作り候。
馨子を煙とせし北米の空、ふり仰いで涙煙の如く胸を襲ふ。

勝 郎

十

生きて居る者は、苦まねばならぬ。死んだお馨さんは、靈になつて猶働きつゝあ
るのだ。

「お馨さんの梅」は、木の生くる限り春毎に咲くであらう。短く此生に生きたお馨
さんは、永久に靈に生きて働くであらう。

關 寬 翁

一

明治四十一年四月二日の晝過ぎ、妙な爺さんが訪ねて来た。北海道の山中に牛馬を飼つて居る關と云ふ爺と名のる。鼠の眼の様に小さな可愛い眼をして、十四五の少年の様に紅味ばしつた顔をして居る。長い灰色の髪を後に撫でつけ、鬚あごに些ちとの疎そ髯げんをヒラ／＼させ、木綿づくめの着物に、足駄ばき。年を問へば七十九。強健な老人振りに、主人は先づ我を折つた。

兎も角も上に請しやうじ、問はるゝまゝにトルストイの消息など話す。爺さんは五十年來實行して居る冷水浴の話、元來醫者で今もアイヌや移住民に施療して居る話、數年前物故した婆はらさんの話などして、自分は婆の手織物ほか着たことはない、此も婆

の手織だと云つて、ごり／＼した無地の木綿羽織の袖を引張つて見せた。面白い爺さんだと思ふた。

其後「命の洗濯」「旅行日記」「目ざまし草」など追々爺さんから自著の冊子を送つて来た。面白い爺さんの一癖も二癖もある正體が讀めて来た。經歷の一端も分かつた。爺さん姓は關名は寬、天保元年上總國に生れた。貧苦の中から志を立て、佐倉佐藤泰然の門に入つて醫學を修め、最初銚子に開業し、更に長崎に遊學し、後阿波蜂須賀侯に招かれて徳島藩の醫となつた。維新の際は、上野の戦争から奥羽戦争まで、官軍の軍醫、病院長として、熱心に働いた。順に行けば、軍醫總監男爵きさきは造作さくもないことであつたらうが、持つて生れた骨が兎角邪魔まじをなして、上官かみと反そりが合はず、官に頼つて事を爲すは駄目と見限りをつけて、阿波徳島に歸り、家祿を奉還して、開業醫の生活を始めたのが、明治五年であつた。爾來しこゝに、孜々しとして仁術を續け、貧民の施療、小兒の種痘しんとうなど、其數も夥しいものになつた。家も相應

に富むだ。五男二女、孫も出来、明治三十四年には翁媪共に健やかに目出度金婚式を祝ふた。剛氣の爺さんは、此ま、樂隱居で朽果つるを嫌つた。札幌農學校に居た四男を主として、北海道の山奥開墾牧場經營を企て、老夫婦は養老費の全部及び老いの生命二つを其牧場に投す可く決心した。婆さんもエラ者である。老夫婦は住み馴れた徳島をあとにして、明治三十五年北海道に移住し、老夫婦自ら鋤をとり鎌をとつて働いた。二年を出でずして婆さんは亡くなる。牧場主任の四男は日露戦役に出征する。爺さん一人淋しく牛馬と留守の任に當つて居たが、其後四男も歸つて來たので、寒中は北海道から東京に出て來て、舊知を尋ね、新識を求め、朝に野に若手の者と談話を交換し意見を闘はすを樂の一として居る。讀書、旅行と共に、若い者相手の他流試合は、爺さんの道樂である。旅行をするには、風呂敷包一つ。人を訪ふには、初對面の者にも紹介狀など持つては往かぬ。先日の來訪も、型の如く突然たるものであつた。

爺さんが北海道に歸つてからよこした第一の手紙は、十三行の罫紙に蠅頭の細字で認めた長文の手紙で、農とも讀書子ともつかぬ中途半端な彼の生活を手強く攻撃したものであつた。爺さんは年々雁の如く秋は東京に來て春は北に歸つた。上京毎にわざ／＼來訪して、追々懇意の間柄となつた。手づから採つた干薇、萩のステツキ、鶉豆など、來る毎に持て來てくれた。或時彼は湘南の老父に此爺さんの噂をしたら父は少し考へて、待てよ、其は昔關寬齋と云つた男じやないかしらん、長崎で脚疾の治療をしてもらつたことがある、中々きかぬ氣の男で、松本良順など手古摺つて居た、と云つた。爺さんに聞いたら、果して其は事實であつた。其後爺さんは湘南漫遊の砌老父が許に立寄つて、八十八の舊患者は八十一の舊醫師と互に白鬚を撫して五十年前崎陽の昔を語ると云ふ一幕があつた。所謂縁は異なるものである。

北海道も直ぐ開けて了ふ、無人境が無くならぬ内遊びに來い遊びに來いと、爺さん頻りに促す。彼も一度は爺さんの生活ぶりを見たいと思ひながら、何や角と延ば

して居る内に、到頭翁さんの住む山中まで汽車が開通して了つた。そこで彼は妻、女を連れてあたふた武藏野から北海道へと遊びに出かけた。

左に掲ぐるは、訪問記の數節である。

二

「北海道十勝の池田驛で乗換へた汽車は、秋雨寂しい利別川の谷を北へ北へまた北へ北へと駛つて、夕の四時湊別驛に着いた。明治四十三年九月二十四日、網走線が湊別まで開通した開通式の翌々日である。

今にはじめぬ鐵道の幻術、此正月まで草葺の小屋一軒しかなかつたと聞く湊別に、最早人家が百戸近く、旅館の三軒料理屋が大小五軒も出來て居る。開通即下のごつたかへす湊別館の片隅で、祝の赤飯で夕飯を濟まし、人夫の一人に當年五歳の女兒鶴、一人に荷物を負つてもらひ、余等夫婦洋傘を翳してあとにつき、斗満の關牧場

さして出かける。

新開町の雑沓を後にして、道は直ぐ西に蒼い黄昏の煙に入つた。やがて橋を渡る。湊別橋である。開通を當に入り込む人間が多く仕事が無くて困ると云ふ人夫の話聞きながら、滑りがちな爪先上りの路を、懐中電燈の光に照らして行く。雨は止むで、日はとつぶり暮れた。不圖耳に入るものがある。颯々——颯々と云ふ音。はつとして余は耳を立てた。松風か。否、松風でない。峰の嵐でもない。水聲である。余は耳を澄ました。何と云ふ爽やかな音か。此世の聲で無い。確に別天地から通ふて來る、聴くまゝに耳澄み心澄み魂も牽き入れらるゝ様ななつかしい音である。人夫にきくと、果して斗満川であつた。やがて道は山側をめぐつてだら／＼下りになつた。水聲の方からばつと火光がさす。よく見れば右側山の手に家がある。道の左側にも家がある。人の話聲がして止むだ。此だな、と思つて音なはずと、道側の矮い草葺の中から眞黒な姿がぬつと出て「東京のお客さんちやありませんか。御隠居が毎日

御待兼ねです」と云つて、先に立つて案内する。水聲に架す橋を渡つて、長方形の可なり大きな建物に來た。導かるゝまゝにドヤ／＼戸口から入ると、眩しい洋燈の光に初見の顔が三つ四つ。やがて奥から咳拂ひと共に爺さんが出て來た。

「お、鶴坊來たかい。よく來た。よく來た」

* * *

九月二十五日。雨。

爺さんでは長過ぎる。不躰でもある。あらためて翁と呼ぶ。翁が今住んで居る家は、明治三十九年に出來た官設の驛遞で、四十坪程の質素な木造。立派ではないが建て離しの納屋、浴室、客室もあり、裏に鶏を飼ひ、水も掘井戸、山から引いたのと二通りもあつて、贅澤はないが不自由もない住居だ。翁は此處に三男餘作君、牧場創業以來の老功片山八重藏君夫婦、片山夫人の弟にして在郷軍人たる田邊新之助君、及び其病妹と共に住むで居る。此處は十勝で、つい川向ふが釧路、創業當時の

草舎も其の川向にあつて、今四男又一君が住むで居る。驛遞の前は直ぐ北見街道、其向ふは草叢を拓いて牛馬舎一棟、人の住む矮い草舎が一棟。道側に大きなヤチダモが一樹黄葉して秋雨を滴らして居る。

驛遞東南隅の八疊が翁の居間である。硝子窓から形ばかり埒を結つた自然のまゝの小庭や甘藍畑を見越して、黄葉のウエンシリ山をつひ鼻のさきに見る。小机一つ火の氣の少ない箱火鉢一つ。床には小杉樞廊の「淡きもの味はへよとの親こゝろ共にしのびて昔かたらふ」と書いた幅を掛けてある。翁は今日も余等が寢て居る内に、山から引いた氷の様な水を浴び、香を焼いて神明に祈り、机の前に端座して老子を讀むのである。老子は翁の心讀書、其については創世記、詩篇、約百記なども愛讀書目の中にある。アブラハム、ヤコブなど遊牧族の老會長の物語は、十勝の山中に牛馬と住む己が境涯に引くらべて、殊に興味が深いのであらう。

落つけよとの雨が終日降りくらす。翁の室と板廊下一つ隔てた街道側の八疊にく

此様なものを作つたと云つて見せる。場内の農家に頒つ刷物である。

日々の心得の事

- 一 一家和合して先祖を祭り老人を敬ふべし
- 一 朝は早く起き家業に就き夜は早く寝につくべし
- 一 諸上納は早く納むべし
- 一 金銭取引の勘定は時々致すべし
- 一 他人と寄合の時或は時間の定ある時は必ず守るべし
- 一 何事にも約束ある上は必ず實行すべし
- 一 偽言は一切いふべからず
- 一 火の要心を怠るべからず
- 一 掃除に成丈注意すべし
- 一 流し元と掃溜とは氣をつけて衛生に害なきやう且肥料にすべき事

- 一 家具の傷みと障子の切張とに心付くべし
- 一 喰物はむだにならぬ様に心を用ゐ別して味噌と漬物とは用ゐたる跡にも猶心を用ふべし
- 一 他人より物をもらひたる時は返禮を忘るべからず
- 一 買物は前以て價を聞き現金たるべし一厘にてもむだにならぬ様にすべし
- 一 總て身分より内輪に諸事に心懸くべし人を見さげぬ様に心懸くべし
- 一 常着は木綿筒袖たるべし
- 一 種物は成るべく精撰して取るべし
- 一 農具は錆ぬ様に心懸くべし
- 一 貯金は少しづゝにても怠るべからず
- 一 一ヶ年の収入に應じて暮方を立つべし
- 一 一家の經濟は家族一同に能く知らせ置くべし

- 一 他人の子をも我子にくらべて愛すべし
- 一 他人より諸品を借りたる時は早く返すことに心がくべし
- 一 場内の農家は互に諸事を最も親しくすべし
- 一 平生自己の行に心を盡すべし且世上に對すべし

明治四十三年

翁はもと／＼我利から廣大の牧場地を願下げたと思はるゝを心から嫌つて、目下場内の農家がまだ三四戸に過ぎぬのをいたく慙ぢ、各十町を所有する中等自作農をせめて百戸は場内に入るべく切望して居る。

午後アイヌが來たと呼ばれるので、臺所に出て見る。アツシを着た四十左右の眼の鋭い黒鬚蓬々たる男が腰かけて居る。名はエンデコ、翁の施療を受けに利別から來た患者の一人だ。此馬鹿野郎、何故もつと早く來ぬかと翁が叱る。アイヌはキマリ惡るさうに笑つて居る。着物をぬいで御客様に毛だらけの膚を見せろ、と翁が云

ふ。體が臭いからとモチ／＼するのを無理やりに帶解かせる。上半身が露はれた。正に熊だ。腹毛胸毛はものかは、背の真中まで二寸ばかりの眞黒な熊毛がもぢやもぢや渦まいて居る。余も人並はづれて毛深い方だが、此アイヌに比べては、中々足下にも寄れぬ。熟々感嘆して見惚れる。翁は丁寧に診察を終つて、白や紫澤山の藥瓶が並むだ次の間に調劑に入つた。

河西支廳の測量技手が人夫を連れて宿泊に來たので、余等は翁の隣室の六疊に移る。不圖硝子窓から見ると、庭の檜の切株に綺麗な縞栗鼠が來て悠々と遊ぶで居る。開けたと云つても、まだ／＼山の中だ。

四時過ぎになると、翁の部屋で謠がはじまつた。「今を初の旅衣——」ボンと鼓が鳴る。高砂だ。謠も鼓もあまり上手とも思はれぬが、毎日午後の四時に粥二碗を食つて、然る後高砂一番を謠ひ、日が暮るゝと灌水して床に入るのが、翁の常例ださうな。

夕飯から余等も臺所の板敷で食はしてもらう。食後臺所の大きな暖爐を圍むで、餘作君片山君夫婦と話す。餘作君は父翁の業を嗣いで醫者となり、日露戦後哈爾濱で開業して居たが、此頃は牧場分擔の爲め呼ばれて父翁の許に歸つて居る。片山君は紀州の人、もと北海道鐵道に奉職し、後關家に入つて牧場の創業に當り、約十年斗滿の山中に努力して、まだ東京の電車も知らぬと笑つて居る。夫妻に子供が無い。少し痘痕ある鳳眼にして長面の片山君は、錢函の海岸で崖崩れの爲死んだ愛犬の皮を胴着にしたのを被て、手細工らしい小箱から煙草をつまみ出しては長い煙管でふかしつゝ、悠然とストロブの側に胡踞かき、關翁が婆ア婆アと呼ぶ頬の殺げたきかぬ氣らしい細君は、モンベ袴をはいて甲斐ふしく流しもとに立働いて居ると、隅の方にはよく兎を捕ると云ふ大きな猫の夫婦が箱の中に共寝して居る。話上手の片山君から創業時代の面白い話を澤山に聞く。達別は古來鹿の集る所で、アイヌ等が鹿を捕るに、係蹄にかゝつた瘡せたのは追放し、肥大なやつばかり撰取りにして居

たさうだ。鮭、鱒、鯉などは持ちきれぬ程釣れて、草原にうつちやつて來ることもあり、銃を知らぬ山鳥はうてば落ちうてば落ちて、うまいもの、例にもなる山鳥の鹽焼にも鑿いて了まつた。たゞ小蟲の多いは言語道斷で、蛇などは人を避くることを知らず、追はれても平氣にのたくつて居たさうな。寒い話では、緞の刃先にはさまつた豆粒を噛みに來た鼠の舌が緞に氷りついたまゝ、死に、鼠を提げると重たい開墾緞がぶらり下つてもはなれなかつた話。哀れな話では、十勝から生活のたつきを求めて北見に越ゆる子もちの女が、食物に困つて山道に捨子した話。寂しい話では、片山夫人が良人の留守中犬を相手に四十日も雪中斗滿の一つ家に暮らし、四十日間に見た人間の顔としては唯アイヌが一人通りかゝりに寄つたと云ふ話。不便な話では、牧場は釧路十勝に跨るので、斗滿から十勝の中川郡本別村の役場までの十餘里はまだ可として、釧路の白糠村役場までは足寄を経て近道の山越えしても中途露宿して二十五里、はがき一枚の差紙が來てもものこゝ出かけて行かねばならなかつ

た話。珍な話ではつい其處の斗満川原で、鶺鴒が鷹の子育てた話。話から話と聞いて居ると、片山君夫婦が妬ましくなつた。片山君も十年精勤の報酬の一部として、牧場内の土地四十餘町歩を分與され、これから關家を辭して自家生活の經理にかゝるのであるが、過去十年關家に盡した創業の勞苦の中に得た程の樂は、中々再びし難いかも知れぬ。

九月廿六日。霽。

翁の縁戚の青年君塚貢君の案内で、親子三人湊別の方に行つて見る。斗満橋を渡ると、街道の北側に葭葺の草舎が一棟。明治三十五年創業の際建てた小屋だ、と貢君説明する。今は多少の修補をして、又一君と其縁戚の一少年とが住んで居る。直ぐ其側に二十坪程の木羽葺の此山中にしては頗立派なまだ眞新しい家が、戸をしめたまゝになつて居る。此は關翁の爲に建てられた隱宅だが、隱居嫌の翁は其を見向きもせずして寧驛遞に住み、臺所の板敷にストーブを圍むで一同と黍飯を食つて居

るのである。道をはさむで、粗造な牛舎や馬舎が幾棟、其處らには割薪が山のやうに積むである。此邊は蕨を下草にした檜の小山を北に負ふて暖かな南向き、斗満の清流直ぐ傍を流れ、創業者の住居に選びさうな場所である。山角をめぐつて少し往くと、山際に草葺のあばら舎がある。片山君等が最初に建てた小舎だが、便利のわるい爲め見すて、川側に移つたさうな。何時の間にか湊別橋に來た。先夜は可なりあるやうに思つたが、驛遞から十丁には過ぎぬ。聞けば、關牧場は西の方ニオトマムの邊から起つて、斗満の谷を川と東へ下り、湊別川クンボツ川斗満川の相會する湊別谷を東のトマリとして南に折れ、三川合して名をあらためて利別川の谷を下つて上利別原野の一部に及び、云はゞ一大鎌狀をなして、東西四里、南北一里餘、三千餘町歩、湊別停車場及湊別市街も其内にある。鐵道院では、池田驛高島驛等附近の農牧場所有者の姓氏を驛の名に附する先例により、今の停車場も關と命名すべく内意を示したが、關翁が辭して湊別驛となつたさうな。市街は見ず、橋から引返

へす。歸路斗滿橋上に立つて、や、久しく水の流を眺める。此あたり川幅六七間もあらうか。湫別橋から瞰むる湫別川の川床荒れて水の濁れるに引易へ、斗滿川の水の清さ。一個々玉を欺く礫の上を琴の相の手弾く様な音立て、金糸と閃めく日影紊して駛り行く水の清さは、まさしく溶けて流るゝ水晶である。「千代かけてそゝぎ清めん我心、斗滿の水のあらん限りは」と翁の歌が出来たも尤である。貢君の話によれば、斗滿川の水温は湫別川の其れより三四度も低いさうな。人跡到らぬキトウス山の陰から来るのだ。然もあらう。今こそ驛遞には冬も氷らぬ清水が山から引かれてあるが、まだ其等の設備もなかつた頃、翁の灌水は夏はもとより冬も此斗滿川でやつたのだ。此斗滿の清流が數尺の厚さに氷結した冬の曉、爛々たる曙の明星の光を踏んで、浴衣一枚草履ばきで此川邊に下り立ち、斧で氷を打割つて眞裸に飛び込むだ老翁の姿を想ひ見ると、畏敬の情は自然に起る。

驛遞に歸つて、道應技師林常夫君に面會。駒場出の壯年の林學士。目下ニオトマ

ムに天幕を張つて居る。明日關翁と天幕訪問の約束をする。

昨夕來泊した若年の測量技手星正一君にも面會。星君が連れた若い人夫が、食饌のあと片付、掃除、何くれとまめくしく立働くを、翁は喜ばしげに見やつて、聲をかけ、感心だと賞める。

午後は親子三人、此度は街道を西南に坂を半上つて、牧場の埒内に入る。東向きの山腹、三圍四圍もある檜の大木が、幾株も黄葉の枝を張つて、其根もとに清水が湧いたりして居る。馬牛の群の中を牛糞を避け、馬糞を誇ぎ、牛馬舎の前を通つて、斗滿川に出た。少し川邊に立つて居ると、小蟲が黒糠の様になかる。關翁が牧場記事の一節も頷かれる。左程大くはないと云つても長六尺はある藪や、三尺も伸びた蓬、自然生の松葉獨活、馬の尾について殖えると云ふ山牛蒡、反魂香と云ふ七つ葉などが茂つて居る川沿ひの徑を通つて、斗滿橋の袂に出た。一坪程の小さな草舎がある。屋後には熊の髑髏の白くなつたのや、まだ比較的生しいのを突き刺した棹、

熊送りに用ふるアイヌの幣束イナホなどが十數本、立つたり倒れたりして居る。此は關家で熊狩に雇つて置くアイヌのイコサツクルが小屋で、主は久しく留守なのである。覗て見ると、小屋の中は薄暗く、着物の様なものが片隅に置いてある。昔は置きつばなしで盗まる、と云ふ様な事はなかつたが、近來人が入り込むので、何時かも大切の鐵砲を盗まれたさうだ。(イコサツクルは何を悲觀したのか、大正元年の夏多くの熊を射た其鐵砲で自殺した。)

驛遞にはいる時、大勢の足音がする。見れば、巨鋸や囊を背負ひ藥罐を提げた男女が、幾組も〴〵西へ通る。三井の伐木隊である。富源の開發も結構だが、檜の木はオークの代用に輸出され、エゾ松トマ松は紙にされ、胡桃は銃床に、ドロはマツチの軸木になり、樹木の豊富を誇る北海道の山も今に裸になりはせぬかと、余は一種猜忌の眼を以て彼等を見送つた。

夕方臺所が賑やかなので、出て見る。眞白に塗つた法界屋の家族五六人、茶袋を

手土産に、片山夫人と類に挨拶に及むで居る。やがて月琴を弾いて盛に踊つた。

夕食に鮪の刺身がつく。十年ぶりに海魚の刺身を食ふ、と片山さんが嘆息する。

汽車の御馳走だ。

要するに斗満も開けたのである。

九月二十七日。美晴。

今日は斗満の上流ニオトマムに林學士の天幕を訪ふ日である。朝の七時關翁、余等夫妻、草鞋ばきで出掛ける。鶴子は新之助君が負つてくれる。貢君は余等の毛布や、關翁から天幕へみやげ物の南瓜、眞桑瓜、玉蜀黍、甘藍などを駄馬に積み、其上に打乗つて先發する。仔馬がヒョコ〜ついて行く。又一君も馬匹を見がてら阪の上まで送つて來た。

阪を上り果て、圍ひのトゲ付鐵線を潜り、放牧場を西へ西へと歩む。赭い牛や黒馬が、親子友だち三々伍々、群れ離れ寝たり起きたり自在に遊んで居る。此處は

アイヌ語でニケウルルバクシナイと云ふさうだ。平坦な高原の意。や、黄ばんだ檜、
櫛の太木が處々に立つ外は、打開いた一面の高原霜早くして草皆枯れ、彼方此方に
矮い叢をなす萩はすがれて、馬の食ひ残した萩の實が觸るとから／＼音を立てる。
此萩の花ざかりに駒の悠遊する畫趣が想はれ、こんな所に生活する彼等が羨ましく
なつた。そこで余等も馬に劣らじと鼻孔を開いて初秋高原清爽の氣を存分に吸ひつ
、或は關翁と打語らひ、或は黙して四邊の景色を眺めつ、行く。南の方は軍馬補
充部の山又山狐色の波をうち、北は斗滿の谷一帶木々の色すでに六分の秋を染めて
居る。ふりかへつて東を見れば、窪別谷を劃るエンベツの山々を踏まへて、釧路の
雄阿寒、雌阿寒が、一は筈のやう、他は菅笠のやうな容をして濃碧の色くつきりと
秋空に聳えて居る。や、行つて、倒れた檜の大木に腰うちかけ、一休してまた行く。
高原漸く聳つて、北の片岨には雜木にまじつて山櫻の紅葉したのが見える。櫻花見
にはいつも此處へ來る、と關翁語る。

やがて放牧場の西端に來た。直ぐ眼下に白樺の簇立する谷がある。小さな人家一
つ二つ。煙が立つて居る。それからすつと西の方は、斗滿上流の奥深く針葉樹を語
る印度藍色の山又山重なり重なつて、秋の朝日に董色の微笑を浮べて居る。余等は
や、久しく恍惚として眺め入つた。あ、彼の奥にこそ玉の如き斗滿の水源はあるの
だ。「うき事に久しく耐ふる人あらば、共に眺めんキトウスの月」と關翁の歌ふた其
キトウスの山は、彼奥にあるのだ。而して關翁の夢魂常に遊ぶキトウス山の西、石
狩嶽十勝嶽の東、北海道の真中に當る方數十里の大無人境は、其奥の奥にあるのだ。
翁の迦南は其處にある。創業から創業に移る理想家の翁にとつて、汽車が開通した
窪別なんぞは最早久懸の地では無い。其身斗滿の下流に住みながら、翁の雄心はと
くの昔キトウスの山を西に越えて、開闢以來人間を知らぬ原始的大寂寞境の征服に
駛せて居る。共に眺めんキトウスの月、翁は久しくキトウスの月を共に眺むる人を
求めて居る。若い者さへ見ると、胸中の秘をほのめかす。此日放牧場の西端に立つ

て遙に斗満上流の山谷を望むた時、余は翁が心絃の震へを切ないほど吾心に感じた。

鐵線を潜つて放牧場を出て、谷に下りた。關牧場はこれから北へ寄るので、此れからニオトマムまでは牧場外を通るのである。善良な顔をした四十餘の男と、十四五の男兒と各裸馬に乗つて來た。關翁が聲をかける。路作りかた／＼、遠別まで買物に行くと云ふ。三年前入込む炭焼をする人さうな。やがて小さな流れに沿ふ熊笹葺きの家來た。炭焼君の家である。白樺の皮を壁にした殖民地式の小屋だが、内は可なり濶くて、疊を敷き、奥に箆筒柳行李など列べてある。妻君も善い顔をして居る。圍爐裏側に腰かけて澁茶の馳走になつて居ると、天幕から迎ひの人夫が來た。

茶を飲みながらふと見ると、壁の貼紙に、彼岸會説教、斗満寺と書いてある。斗満寺！此處に其様なお寺があるのか。え、ありますと云ふ。折りからさきに馬に乗

つてた子の弟が二人、本を抱へて其お寺から歸つて來たので、早速案内を頼む。白樺の林の中を五六丁行くと、所謂お寺に來た。此はまた思ひ切つて小さな粗造な熊笹葺き、手際悪く張つた壁の白樺赤樺の皮は反つくりかへつて居る。關翁を先頭にとや／＼入ると、形ばかりの床に荒蕪を敷いて、汚れた莫大小のシャツ一つ着た二十四五の毬栗頭の坊さんが、ちよこなんと座つて居る。後に、細君である、十八九の引つめに結つて筒袖の娘々した婦人が居る。土間には、西洋種の瓢形南瓜や、馬鈴薯を堆く積むである。奥の壁つきには六字名號の幅をかけ、御燈明の光ちら／＼、眞鍮の金具がほのかに光つて居る。妙に曾が迫つて來た。紙片と鉛筆を出して姓名を請ふたら、斗満大谷派説教場創立係世並信常、と書いてくれた。朝露の間は子供に書を教へ、それから日々夫婦で勞働して居るさうだ。御骨も折れやうが御辛抱なさい、急いで立派な寺など建てないで、と云つて別を告げる。戶外に紫の蝦夷菊が咲いて居た。あとで聞けば、坊さんは越後者なる炭焼小屋の主人が招いたので、去

年も五十圓から出したさうだ。檀家一軒のお寺もゆかしいものである。

樺林を拓いて、また一軒、熊笹と玉蜀黍の稗で葺いた小舎がある。あたりには樺を伐つたり焼いたりして、黍など作つてある。關翁が大聲で、「婆さん如何したかい、何故薬取りに來ない？」と怒鳴る。爺さんが出て來て挨拶する。婆さんは留守だった。十一二の男兒が出て來る。翁は其肩をた、き顔を覗き込むやうにして「如何だ、關の爺を識つてるか。ウム、識つてるか」子供がにこ／＼笑ふ。路は樺林をぬけて原に出る。霜枯れた草原に、野生松葉獨活の實が紅玉を鑲めて居る。不圖白木の鳥居が眼についた。見れば、子供が抱へて行つて了ひさうな小さな荒削りの祠が枯草の中に立つて居る。誰が何時來て建てたのか。誰が何時來て拜むのか。西行ならばたしかに歌よむである。歌も句もなく原を過ぎて、崖の下、小さな流に沿ふてまた一つ小屋がある。これが斗滿最奥の人家で、驛遞から此處まで二里。最後の人家を過ぎてしばらく行く程に、イタヤの老樹が一株、大分紅葉した枝を、振面白く

さし伸べて居る小高い丘に來た。少し早いが此處で晝食とする。人夫が落の葉や蓬、熊笹引かゝつてイタヤの蔭に敷いてくれたので、關翁、余等夫妻、鶴子も新之助君の背から下りて、一同草の上に足投げ出し、梅干菜で握飯を食ふ。流れは見えぬが、斗滿の川音は耳爽に、川向ふに當る牧場内の雜木山は、午の日をうけて、黄に紅に縁に燃えて居る。やがてこゝを立つて小さな溪流を渡る時、一同石に跪いて清水をむすぶ。

最早人氣は全く絶えて、近くなる時斗滿の川音を聞くばかり。鷹の羽など落ちて居る。徑は稀に溪流を横ぎり、多く雜木林を穿ち、時にじめ／＼した濕地を渉る。先日來の雨で、處々に水溜が出来て居るが、天幕の人達が熊笹を敷き、丸木を渡しなぞして置いて呉れたので、大に助かる。關翁は始終一行の殿として、股引草鞋尻引からげて杖をお伴に／＼やつて來る。足場の悪い所なぞ、思はず見かへると、後見るな／＼と手をふつて、一本橋にも人手を假らず、堅固に歩いて來る。斯くて

四里を歩むで、午後の一時溪聲響く處に鼠色の天幕が見えた。林君以下きながしのくつろいだ姿で迎へる。

斗満川邊の少しばかりの平地を拓いて、天幕が大小六つ張つてある。アイヌの小屋も一つある。林林學士を統領として、屬員人夫アイヌ約二十人、此春以來此處を本陣として、北見界かけ官有針葉樹林の調査をやつて居るのである。別天地の小生涯、川邊に風呂、炊事場を設け、林の蔭に便所をしつらひ、麻繩を張つて洗濯物を乾し、少しの空地には青菜まで出來て居る。

茶の後、直ぐ川を渡つて針葉樹林の生態を見に行く。濶五間程の急流に、楢の大木が倒れて自然に橋をなして居る。幹を踏み、梢を踏み、終に枝を踏む輕業、幸に關翁も妻も事なく渡つた。水際の雜木林に入ると、「あ、誰れか盜伐をやつたな」と林學士が云ふ。胡桃が伐つてある。木の名など頻に聞きつゝ、針葉樹林に入る。此林特有の冷氣がすうと身を包む。蝦夷松や楡松、昔此邊の帝王であつたらうと思は

る、大木倒れて朽ち、朽ちた其木の屍から實生の若木が蘆々と伸びて、若木其ものが徑一尺に餘るのがある。サルヲガセがぶら下つたり、山葡萄が絡むたり、其自身針葉樹林の小模型とも見らるゝ、緑、褐、紫、黄、さまざまの蘚苔をふわりと纏ふて居るのもある。其間をトマムの剩水が盆景の千松島と云つた様な緑苔の塊を洞つて、流るゝとはなく唯硝子を張つた様に光つて居る。やがて麓に來た。見上ぐれば、蝦夷松楡松峯へ峰へと彌が上に立ち重なつて、日の目も漏れぬ。此邊はもう關牧場の西端になつてゐて、林は直ちに針葉樹の大官林につゞいて居るさうだ。此永劫の薄明の一端に佇んで、果なくつゞく此深林の奥の奥を想ふ。林學士は斯く云ふた、北見、釧路、十勝に跨る針葉樹の處女林には、アイヌを連れた技師技手すら、踏み迷ふて途方に暮るゝことがある、其様な時には峰を攀ち、峰に秀づる蝦夷松楡松の百尺もある梢に猿の如く攀ち上り、展望して方向をきめるのです、と。突然銃聲が響いた。唯一發——あとはまた森となる。日光戀しくなつたので、ここから引返へ

し、林の出口でサビタの杖など伐つてもらつて、天幕に歸る。

勝手元は御馳走の仕度だ。人夫が採つて來た茶盆大の舞茸は、小山の如く蕈に積まれて居る。やがて銃を負ふてアイヌが歸つて來た。腰には山鳥を五羽ぶら下げて居る。また一人川下の方から釣棹肩に歸つて來た。銃釣りに往つたのだ。やがてまた一人銃を負ふて歸つた。人夫が立迎へて、「何だ、唯一羽か」と云ふ。此も山鳥。先刻聞いた銃聲の果なのであらう。火を焚く、味噌を摺る、魚鳥を料理する、男世帯の目つらを抓む勝手元の忙しさを傍目に、關翁はじめ余等一同、かはるゝ川畔に往つて風呂の馳走になる。荒削りの板を切り組むだ風呂で、今日は特に女客の爲め、天幕のきれを屏風がはりに垂れてある。好い氣もちになつて上ると、秋の日は暮れた。天幕にはつりランプがつく。外は樺の篝火が眞晝の様に明るい。余等の天幕の前では、地上にかん／＼炭火を熾して、ブツ／＼切りにした山鳥や、尾頭つきの鮭を醬油に浸しジュウ／＼炙つては持て來、炙つては持て來る。煮たのも來る。

舞茸の味噌汁が來る。焚き立ての熱飯に、此山水の珍味を添へて、關翁以下當年五歳の鶴子まで、健啖思はず數碗を重ねる。

日はもうとつぷり暮れて、斗滿の川音が高くなつた。幕外は耳もきれそな霜夜だが、帳内は火があるので汗ばむ程の温氣。天幕の諸君は尙も馳走に薩摩琵琶を持出した。十勝の山奥に來て薩摩琵琶とは、思ひかけぬ豪興である。彈手は林學士が部下の鹽田君、鹿兒島の壯士。何をと問はれて、取りあへず「城山」を所望する。今日は九月二十七日、城山没落は三十三年前の再昨日であつた。鹽田君はやをら琵琶を抱へ、眼を半眼に開いて、咳一咳。外は天幕總出で立聞く氣はい。「夫れ——達人は——」聲はいさゝか震へて響きはじめた。余は瞑目して耳をすまます。「大隅山の狩くらにイ——眞如の月の——」彈手は蕭々と歌ひすゝむ。「何を怒るや怒り猪の——俄に激する數千騎」突如として山崩れ落つ鶴越の逆落し、四絃を奔る撥音急雨の如く、呀と思ふ間もなく身は悲壯渦中に捲きこまれた。時は涼秋九月、處は北海山

中の無人境、篝火を焚く霜夜の天幕、幕の外には立聴くアイヌ、幕の内には隼人の薩摩壯士が神來の興まさに旺して、歌斷ゆる時四絃續き、絃黙す時聲謠ひ、果ては聲音一齊に軒昂鳴咽して、加之始終斗滿川の伴奏。手を膝に眼を閉ちて聴く八十一の翁をはじめ、皆我を忘れて、「戎衣の袖をぬらし添ふらん」と結びの一句低く咽んで、四絃一撥蕭然として曲終るまで、息もつかなくなつた。讚辭謝辭口を衝いて出る。天幕の外もさゞめいた。興未だ盡きぬので、今一つ「墨繪」の曲を所望する。終つて此興趣多い一日の記念に、手帳を出して關翁以下諸君の署名を求めぬ。

それから話聞くべくアイヌを呼んでもらふ。御召につれて髭鬚二つランプの光に現はれ、天幕の入口に蹲踞した。若い方は、先刻山鳥五羽うつて來た白手留吉、漢字で立派に名がかけて、話も自由自在なハイカラである。一人は、胡麻鹽髯胸に垂る、魁偉なアイヌ、名は小川ヤイコク、これはあまり口が利けぬ。アイヌの信仰、葬式の事、二三風習の質問などとして、最後に、日本人に不満な點はと問ふたら、ヤ

イコクは重い口から「日本人のゴロツクがイヤだ」と吐き出す様に云つた。ゴロツクは脅迫の意味さうな。乳呑子連れた女が來て居ると云ふので、二人と入れ代りに來てもらふ。眼に凄味があるばかり、例の刺青もして居らず、毛織子の襟がかつた漣縞の綿入なぞ着て居る。名もお花さんと云ふさうだ。妻が少し語を交へて、何もないので紫メレンスの風呂敷をやつた。

惜しい夜も更けた。手を淨めに出て見ると、樺の焚火は燃え下つて、ほの白い煙を颯げ、眞黒な立木の上には霜夜の星爛々と光つて居る。何處かの天幕でばつと火光がさして、黒い人影が出て來たが、直ぐ入つて了つた。川音が颯々と嵐の様に響く。持て來た毛布までかさねて、關翁と余等三人、川音を聞きく趣深い天幕の夢を結んだ。

九月二十八日。微雨。

關翁は起きぬけに川に灌水に行かれた。

朝飯後、天幕の諸君に別れて歸路に就く。成程ニオトマムは山靜に水清く、關翁が斗滿を去つて此處に住みたく思ふて居らるゝも尤である。然し余等は無人境のホンの入口まで來たばかり、せめてキトウス山見ゆるあたりまで行かずに此ま、歸つて了ふのは、甚遺憾多かつた。

歸路余は少し一行に後れて、林中にサビタのステツキを伐つた。足音がするのでふつと見ると、向ふの徑をアイヌが三人歩いて來る。眞先が彼留吉、中にお花さんが甲斐々々しく子を負つて、最後に彼ヤイコクがアツシを着、藤蔓で編むた沓を穿き、マキリを佩いて、大股に歩いて來る。余は木蔭から瞬きもせず其行進を眺めた。秋寂びた深林の背景に、何と云ふ好調和であらう。彼等アイヌは亡び行く種族と看做されて居る。然し此森林に於て、彼等に正に主である。眼鏡やリポンの我等は畢竟新參の侵入者に過ぎぬ。余は殊に彼ヤイコクが五東もある鬚髯蓬々として胸に垂れ、素盞雄尊を見る様な六尺ゆたかな堂々雄偉の骨格と悲壯沈鬱な其眼光を熟視し

た時、優勝者と名のある掠奪者が大なる敗者に對して感ずる一種の恐怖を感ぜざるを得なかつた。關翁が曾て云はれた、山中で山葡萄などちぎると猿に對して氣の毒に思ふ、と。本當だ。山葡萄をちぎつては猿に氣の毒、コクワを採つては熊に氣の毒、深林を聞いてはアイヌに氣の毒なのも、自然である。そこで余は思つた、熊一變せばアイヌに到らん、アイヌ一變せば日本人に到らん、日本人一變せば惡魔に到らん。余はアイヌを好む。尤も熊を好む。

天幕を出る時ほと／＼落ちて居た雨は止み、傘を翳す程にもなかつた。炭焼君の家で晝の握飯を食つて、放牧場の端から二たび斗滿上流の山谷を回顧し、ニケウルルバクシナイに來ると、妻は鶴子を抱いて駄馬に乗つた。貢君が口綱をとつて行く。後から仔馬がひよこ／＼跟いて行く。時々道草を食つて後れては、遽て、駈け出し追つて母馬の横腹に頭をすりつける様にして行く。關翁と余と其あとから此さまを眺めつゝ行く。斯くて午後二時驛遞に歸つた。

關翁は過日來足痛で頗行歩に悩むで居られると云ふことをあとで聞いた。それに少しも其様な容子も見せず、若い者並に四里の往復は全く恐れ入つた。

此夕臺所で大きな甘藍を秤にかける。二貫六百目。肥料もやらず、移植もせぬのだから驚く。關翁が家の馳走で、甘藍の漬物に五升諸(馬鈴薯)の味噌汁は特色である。斗満で食つた土のもの、内、甘藍、枝豆、玉蜀黍、馬鈴薯、南瓜、蕎麥、大根、黍の餅、何れも中々味が好い。唯眞桑瓜は甘味が足らぬ。

九月二十九日。晴。

今日は余等三人餘作君及貢君の案内で、放牧場の農家を見に出かける。阪を上つて放牧場の埒外を南へ下り、ニタトロマツブの細流を渡り、斗満殖民地入口と筆太に書いた棒杭を右に見て、上利別原野に來た。野中、丘の根に、ぼつり／＼小屋が見える。先づ鐵道線路を踏切つて、伏古古潭の教授所を見る。代用小學校である。型の如き草葺の小屋、子供は最早歸つて、田村恰人と云ふ五十餘の先生が一人居た。

それから歩を返へして、利別川邊に模範農夫の宮崎君を訪ふ。矢張草葺だが、さすがに家内何處となく潤ふて、屋根裏には一ばい玉蜀黍をつり、土間には寒中蔬菜を圍ふ窖を設け、農具漁具雪中用具それ／＼掛け列べて、横手の馬小屋には馬が高く嘶いて居る。苦い茶を點れて、森永のドロップスなど出してくれた。余等は注文しなくても立ての玉蜀黍を爐の火で焼いてもらふ。主は岡山縣人、四十餘の細作りな男、餘作君に過日の藥は強過ぎ云々と云つて居た。宮崎君夫婦はもともと一文無しで渡道し、關家に奉公中貯蓄した四十圓を資本とし、拓き分けの約束で數年前此原野を開墾しはじめ、今は十町歩も拓いて居る。今年は豆類其他で千圓も収入があらうと云ふことであつた。細君の阿爺が遙々讃岐から遊びに來て居る。宮崎君の案内で畑を見る。裏には眞桑瓜が蔓の上に澤山ころがり、段落ちの畑には土が見えぬ程玉蜀黍が茂り、大豆は畝から畝に莢をつらねて、試に其一個を割いて見ると、豆粒の肥大實に眼を驚かすものがある。他の一二の小屋は訪はず、玉蜀黍を喰ひ喰ひ歸る。

北海道の玉蜀黍は實に甘い。先年皇太子殿下（今上陛下）が釧路で玉蜀黍を召してそれから天皇陛下へおみやげに玉蜀黍を上げられたも尤である。

午後は又一君の案内で、アイヌの古城址なるチャシコツを見る。達別川に臨むだちよつとした要害の地、川の方は斷崖になり、後はザツとしたものながら、懸濠をめぐらしてある。此處から見ると達別は一目だ。關翁は此坂の上に小祠を建て、斃死した牛馬の靈を祭るつもりで居る。

夕方三人で又一君宅の風呂をもらひに行く。實は過日來往返の毎に斗滿橋の上から見て羨ましく思つて居たのだ。風呂は直ぐ川端で、露天に据ゑてある。水に強いと云ふ桂の徑二尺餘の刳りぬき、鐵板を底に鋪き、其上に踏板を渡したもので、こんな簡易な贅澤な風呂には、北海道でなければ滅多に入られぬ。秋の日落ち谷蒼々と暮る、夕、玉の様な川水を沸した湯に頸まで浸つて、直ぐ傍を流るる川音を聴いて居ると、陶然として即身成佛の妙境に入つて了ふ。

夜上利別のマツチ製軸所支配人久禰田孫兵衛君に面會。もと小學教師をした淡路の人、眞面目な若者である。二里の餘もある上利別から始終關翁の話聞きに来るさうだ。

九月三十日。晴。雪のやうな朝霜。

最早斗滿を去らねばならぬ日となつた。

早朝關翁以下驛遞の人々に別を告げる。斗滿橋を渡つて、見かへると、谷を罩むる碧い朝霧の中に、關翁は此方に向ひ、杖の頭に兩手を組むで其上に額を押付けて居られた。

達別で餘作君に別れ、足寄驛で五郎君の勤務した郵便局を教へられ、高島驛で一君に別れ、池田驛で旭川行の汽車に乗換へ、帯廣で貢君に別れ、余等は來た時の同行三人となつて了つた。汽車は西へ西へと走つて、日の夕暮に十勝國境の白茅の山を石狩の方へと上つた。此處の眺望は全國の線路に殆んど無比である。越し方を

顧みれば、眼下に展開する十勝の太平洋は、蒼茫として唯雲の如くまた海の如く、却て北東の方を望めば、黛色の連山波濤の如く起伏して居る。彼山々こそ北海道中心の大無人境を墻壁の如く取圍む山々である。關翁の心は彼の山々の中にあるのだ。余は窓に凭つて久しく其方を眺めた。中に尤も東北の方に寄つて一峯特立頗異彩ある山が見える。地理を案ずるに、キトウス山ではあるまいか。斗満川の水源、志ある人と共にうち越えて其山の月を東に眺めんと關翁が歌ふたキトウス山ではあるまいか。關翁の心はとく彼山を越えて居る。然しながら翁も老齡已に八十を越した。其身其心に隨ふて彼山を越ゆることが出来るや否や、疑問である。或は翁は摩西の如く、遙に迦南を望むことを許されて、入ることを許されずに終るかも知れぬ。然し翁の心は已にキトウス山を越えて居る。而して翁が百歳の後、其精神は後の若者の體を假つて復活し、必彼山を越え、必彼大無人境を拓くであらう。汽車はますます國境の山を上る。尾花に残る日影は消え、蒼々と暮れ行く空に山々の影も沒し

て了ふた。余は猶窓に凭つて眺める。突然白いものが目の前に閃めく。はつと思つて見れば、老木の梢である。年久しく風霜と闘ふて皮は大部分剝げ、葉も落ちて、老骨稜々たる大蝦夷松が唯一つ峰に突立つて居るのであつた。余の胸は一ぱいになつた。

君に別れ十勝の國の國境

今越ゆるとてふりかへり見し

かへり見れば十勝は雲になりけり

心に響く斗満の川音

雲か山か夕霧遠く隔てにし

翁が上を神護りませ

斯く出たらめをはがきに書いて、石狩の鹿越驛で關翁宛に投函した。」

三

武藏野の彼等が斗滿を訪ふた其年の冬、關翁は最後の出京して、翌明治四十四年の四月斗滿に歸つた。出京中に二度粕谷の茅廬に遊びに來た。三月の末二度目に來た時は、他の來客や學生などに深呼吸の仕方などして見せ、一泊して歸つた。最早今回限り東京には出て來ぬ決心といふ話であつた。主人は甲州街道まで翁を送つた。馬車を待つて乗るから構はず歸れと翁が云ふので、翁を茶店の前に残り、少し用を達して戻りかけると、馬車はすれ違ひに通つたが、車中に翁の影が見えない。と見ると茶店の方から古びた茶の中折帽をかぶつて、例の癖で下顎を少し突出し、濡れ手拭を入れた護謨の袋をぶら提げながら、例の足駄でぼつくり／＼刻足に翁が

歩いて來る。此時も明治四十一年の春初めて來た時着て居た彼無地の木綿羽織だつた。「乗れませんでしたか」「満員だつた」「今車を呼んで來ます」「何、構はん、構はん」と翁が手を掉る。然し翁の足つきは兩三年前よりは餘程弱つて見えた。四五丁走つて、懇意の車屋を頼み、翁のあとを追ひかけさせた。

翁は斗滿に歸つてから、實櫻の苗二本送つて呉れた。其夏久しく氣にかけて居た餘作君の結婚が濟んだ事を報じてよこした。其秋の九月二十六日は雨だつた。一周年前彼等が斗滿に着いた其翌日も雨だつた。彼はこんな出たらめを翁に書き送つた。

去年の今日も斯くは降りきと秋の雨

眺めて獨君をしぞおもふ

程なく翁から其雜著出版の事を依頼して來た。此春翁と前後して北へ歸つた雁がまた武藏野の空に來鳴く時となつた。然し春の別れの宣言の如く、翁は再び斗滿を

出なかつた。秋から冬にかけて、翁は心身の病に衰弱甚しく、已に覺期をした様であつたが、年と共に玉の緒新に元氣づき、わづかに病床を離るゝと直ぐ例の灌水をはじめ、例の細字の手紙、著書の巻首に入る可き「千代かけて」の歌を十三枚、著書を配布す可き二百幾名の住所姓名を一々明細に書いて來た。翁にとりては此が形見のつもりであつたのである。

「命の洗濯」「命の鍛錬」「旅行日記」「目ざまし草」「關牧場創業記事」「斗満漫吟」をまとめて一冊とした「命の洗濯」は、明治四十五年の三月中旬東京警醒社書店から發行された。翁は其出版を見て聊喜の言を漏らしたが、五月初旬には愈死を決したと見えて、逗子なる老父の許と粕谷の其子の許へカタミの品々を送つて來た。其は翁が八十の祝に出來た關牧場の畫模様の服紗と、命の洗濯、旅行日記、目ざまし草に一々歌及俳句を自署したものであつた。兩家族の者残らずに宛て、各別に名前を書いてあつた。「人並の道は通らぬ梅見かな」の句が其の中にあつた。短

冊には、

辭世 一、 諸ともに契りし事は半にて

斗満の露と消えしこの身は

八十三老白里

辭世 二

骨も身もくだけて後ぞ心には

永く祈らん斗満の賑

八十三老白里

死後希望

露の身を風にまかせてそのまゝに

落れば土と飛んでそらまで

八十三老白里

死後希望

死出の山越えて後にぞ樂まん

富士の高根を目の下に見て

八十三老白里

と書いてあつた。

七月初旬、翁の手紙が來て、餘作君は斗満を去り、以前の如く醫を以て立つこと

に決し、自身は斗満に留ることを報じた。書末に左の三首の歌があつた。

寄川戀

我戀は斗満とまむの川の水の音

夜ひるともにやむひまぞなき

病床獨吟

憂き事の年をかさねて八十三やそみとせ

盡きざる罪になほ惱なやみつゝ

死後希望

身は消えて心はうつるキトウスと

十勝石狩兩たけのかひ

翁の絶筆ぜつびつであつた。

四

翁が晩年ばんねんの十字架じじかは、家庭に於ける父子意見の衝突しきょうとつであつた。父は二宮流にのみやうりゅうに與へんと欲し、子は米國風べいこくふうに富まんことを欲した。其爲そのため關家の諍あらそひは、北海道中の評判ひやうはんとなり、色々の風説ふうせつをすら惹起ひきおこした。翁は其爲に心身の精力を消磨せうました。然し翁は自ら信すること篤あつく、子を愛すること深く、神明しんめいに祈いのり、死を決して其子を度どす可く努つとめた。

最後の手紙てがみを受取つてから四ヶ月過ぎた。武藏野むさしのの家族が斗満とまむを訪あそつた其二周年が來た。雁かりは二たび武藏野の空そらに來鳴きないた。此四ヶ月の間には、明治天皇の崩御ほうご、乃木翁のぎきゆうの自刃じじん、など強い印象いんしやうを人に與ふる事實が相ついだ。北の病翁びやうきゆうに如何いかに響ひびいたであらうか、と氣にかゝらぬではなかつたが、推移おしりつて居る内に、突然翁の訃報ふほうが來た。

翁は十月十五日、八十三歳の生涯を斗満なる其子の家に終へたのである。翁の臨終には、形に於て乃木翁に近く、精神に於てトルストイ翁に近く、而して何れにもない苦しみがあつた。然し今は詳に説く可き場合でない。
翁の歌に、

遠く見て雲か山かと思ひしに

歸ればおのが住居なりけり

遮莫 永い年月の行路難、遮莫 末期十字架の苦、翁は一切を終へて故郷に歸つたのである。

次郎 櫻

朝、珍らしく角田の新五郎さんが来た。何事か知らぬが、もうこゝでと云ふのを無理やりに座敷に請じた。新五郎さんは耶蘇信者で、まことに善良な人であるが、至つて口の重い人で、疎遠の挨拶にややしばし時間を移した。それから新五郎さんは重い口を開いて、

「實は——隣の勘五郎さんでございませうが、其の——勘五郎さん處の次郎さんが亡くなられました——」

「エッ、次郎さんが？次郎さんが死んだんですか」

青山學院で最早試験前の忙しくして居るであらうと思つた次郎少年が死んだとは、嘘の様な話だ。

新五郎さんは、持て来た醫師の診断書を見せた。急性肺炎とある。急報に接して飛んで往つた次郎さんの阿爺も、間に合はなかつたさうである。夜にかけて釣臺にのせて連れて来て、組合中の都合で今日葬式をすると云ふのである。

新五郎さんは直ぐ歸り、夫妻も直ぐあとから出かけた。

次郎さんは、千歳村で唯五軒の耶蘇信者の其一軒に生れて、名の如く次男であつた。柏谷の夫妻が千歳村に移住した其春、好成绩で小學校を卒業し、阿爺は師範學校にでも入れやうかと云つて居たのを、勸めて青山學院に入れた。學資不足なので、彼は牛乳を配達したり、學校食堂の給仕をしたりして勉強して居た。斯うして約一年過ぎ、最初の學年試験も今日明日と云ふ際になつて、突然病死したのである。彼は父の愛子であつた。

連日の雪や雨にさながら沼になつた悪路に足駄を踏み込み、彼等夫妻は鉛の様に重い心で次郎さんの家に往つた。

禾場には村の人達が寄つて、板を削り寢棺を拵えて居る。以前は耶蘇教信者と嫌はれて、次郎さんのお祖父さんの葬式の時などは誰も来て手傳ふてくれる者もなかつたさうだ。土間には大勢女の人達が立ち働いて煮焚きをして居る。彼等夫妻は上つて勘五郎さんに苦しい挨拶した。惠比須さまの様な顔をしたかみさんも出て来た。勸めて無理な勉強をさして、此様な事になつてしまつて、まことに濟みません、と詫ぶる外に彼等は慰めの言を知らなかつた。

奥座敷に入ると、次郎さんは蒲團の上に寢て居る。昨日雨中を昇いて来たまゝなので、蒲團が濡れて居る。筒袖の綿入羽織を着て、次郎さんは寢入つた様に死んで居る。額を撫でると氷の様に冷たいが、地藏眉の顔は如何にも柔和で清く、心の美しさも偲ばれる。次郎さんをはじめ此家の子女は、皆小柄の色白で、可愛げな、而して品の良い顔をして居る。阿爺は、亡兒の枕邊に座つて、次郎さんの幼な立の事から臨終前後の事何くれと細かに物語つた。勘五郎さんはもと氣負肌で、烈しい

人、不平の人であつたが、子の次郎さんは非常に柔和な愛の塊の様な兒であつた。次郎さんの小さな時、縁の上から下に居る弟を飛び越し／＼しては遊んで居ると、偶々飛び損ねて弟を倒し、自身も倒れてした、か鼻血を出した。次郎さんは鼻血を滴らしつゝ、弟の泣く方へ走せ寄つて吾を忘れて介抱した。父は次郎さんを愛してよく背に負つたが、次郎さんは成丈父の背を弟に譲つて自身は歩いた。次郎さんは到る處で可愛がられた。學課の出来も好かつた。兩三日前の大雪に、次郎さんは外套もなく濡れて牛乳を配達したので、感冒から肺炎となつたのである。彼は氣分の悪いを我慢して、死ぬる前日迄働いた。死ぬる其朝も、ふら／＼する足を踏みしめて、苦學仲間の某の室に往つて、其日の牛乳の配達を頼むだりした。病氣は早急であつた。醫師が手を盡した甲斐もなかつた。次郎さんは終に死んだ。屍を踏み越えて進む亂軍の世の中である。學校は丁度試験中で、彼の父が急報に接して駆けつけた時、死骸の側には誰も居なかつた。次郎さんは十六であつた。

やがて納棺して、葬式が始まつた。調子はづれの讚美歌があつて、牧師の祈禱説教があつた。牧羊者が羊の群を導いて川を渡るに、先づ小羊を抱いて渡ると親羊が跟いて渡ると云ふ例をひいて、次郎少年の死は神が其父母生存者を導かん爲の死である、と牧師は云ふた。

日が短い頃で、葬式が家を出たのは日のくれた／＼であつた。青山街道に出て、鼻缺地藏の道しるべから畑中を一丁ばかり入り込んで、薄暗い墓地に入つた。大きな松が枝を廣げて居る下に、次郎さんの祖母さんや伯母さんの墓がある。其の祖母さんの墓と向き合ひに、次郎さんの棺は埋められた。

「祖母さんと話しての様だアね」と墓掘の人が云ふ。

「祖母さんが可愛がつて居たからナ」と次郎さんの阿爺が云ふ。

自身子が無くて他人の子ばかり殺して居る夫妻は、荒むだ心になつて、黙つて夜道を歸つた。

一月あまり過ぎた。

梅から櫻、八重櫻と、園内の春は次第に深くなつた。ある朝庭を漫歩きして居た

彼は、

「吁、咲いた、咲いた」

と叫んだ。其は庭の片隅に、坊主になる程伐られた若木の鹽竈櫻であつた。昨年次郎さんが出京入學して程なく、次郎さんの阿爺が持つて来てくれたのである。其時は満開であつた。惜しい事をしたものだ、此花ざかりを移し植ゑて、無事につくであらうか、枯れはしまいか、と其時は危ぶんだ。果して枯枝が大分出来たが、肝腎の命は取りとめて、剪り残されの枝にホンの十二三輪だが、美しい花をつけたので

ある。彼はあらためてつく／＼と其花を眺めた。晩櫻と云つても、普賢の豊麗でなく、墨染鬱金の奇を衒ふでもなく、若々しく清々しい美しい一重の櫻である。次郎さんの魂が花に咲いたら、取りも直さず此花が其れなのであらう。清い、單純な、温かな其花を見つめて居ると、次郎さんのニコ／＼した地藏顔が花心から彼を覗いた様であつた。

(明治四十一年)

きぬや

明治四十三年十二月二十六日。

書院前の野梅に三輪の花を見つけた。年内に梅花を見るは珍らしい。霜に葉を紫に染めなされた黄寒菊と共に、折つて小さな銅瓶に挿す。

例年隣家を頼むだ餅を今年は自家で春くので、懇意な車屋夫妻が臼、杵、蒸籠、釜まで荷車に積んで来て、悉皆春いてくれた。隣二軒に大威張で牡丹餅をくばる。

肥後流の丸餅を造る。碁石程のおかさねは自分で拵へて、鶴子女史大得意である。逗子の父母から歳暮に相模の海の鯛を薄鹽にして送つて来た。

同便で来た手紙はがきの中に、思ひがけない報知が一つあつた。二十二日にとめやのきぬやが面疔で死んだ、と云ふ知せである。

彼女は粕谷草堂夫妻の新生涯に絡むで忘れ難い恩人の一人である。

明治三十九年美的百姓が露西亞から歸つて、青山高樹町に居を定むると間もなく、ある日銀杏返しに白い薔薇の花簪を挿した頬と臉のぼうと紅らむだ二十前後の娘が、突然唯一人でやつて来て、女中になると云ふ。名はとめと云つて江州彦根在の者であつた。兄が東京で商賣をして居るので、彼女も出京してある家に奉公中、逗子で懇意になつた老人夫婦の家の女中から高樹町の家の事を聞き込み、自ら推薦して案内もなく女中に来たのであつた。使つて見ると、少し愚かしい點もあるが、如何にも親切な女で、毎も莞爾々々して居る。一度泥棒が入つて後、彼女は離れて獨女中部屋に寝るを恐れたが、部屋に戸締りをつけてやると、安心して寝た。その兄はシャツ、ズボン下など莫大小物の卸賣をして居るので、彼女も少しミシンを稽古して置きたいと云ふ。承知したら、彼女は喜んで日々辨當持參で高樹町から有樂町のミシン教場へ通つたが、教場があまり騒々しくて頭がのぼせるし、加上ミシン臺

の数が少ないので、生徒間に競争が劇しく、ズウズウしい女達が順番になつた彼女を押のけてミシンを占領したりするので、彼様な處へは最早行くのは嫌でござりませと云つて、到頭女中専門になつた。

彼女が奉仕の天使の如く突然高樹町の家に現はれてから六月目に、主人夫婦は東京を引拂ふて田舎に移つた。如何に貧乏な書生生活でも、東京で二十圓の借家から六疊二室の田舎のあばら家への引越しは、人目には可なりの零落であつた。奉公人にはよい見切時である。然しとめやは馴染もまだそれ程深くない主人夫婦を見捨てなかつた。彼女は東京に居らねばならぬ身體であつたが、當分御手傳をするに云ふて、風呂敷に包むだランプをかへて彼等に跟いて來た。

東京から引越當座の彼等が態は、笑止なものであつた。昨今の知り合ひの石山さんを除く外知人としては素よりなく、何が何處にあるやら、何れを如何するものやら、何角の様子は一切分からず。狭いと汚穢とは我慢するとしても、一つ家の寒さは猛

烈に彼等に肉迫した。二百萬の人いきれで寄り合ふて住む東京人は、人烟稀薄な武藏野の露骨な寒さを想ひ見ることが出來ぬ。二月の末、三月の始、雲雀は鳴いて居たが、初めて田舎のあばら家住居をする彼等は、大穴のあいた荒壁、吹通しの床下建具は不足し、ある建具は破れた此の野中の一つ家と云つた様な小さな草葺を目がけて日暮れ方から鐵桶の如く包圍しつゝ、すうと押寄せて來る武藏野の寒を骨身にしてみても味はつた。風吹き通す臺所に切つてある小さな爐に、木片枯枝何くれと燃される限りをくべてあたつても、顔は火攻、背は氷攻めであつた。とめやが獨で甲斐々々しく駆け廻つた。煮焚勿論、水ももらふてあるき、五丁もはなれた足場の悪い品川堀まで盥をかへて洗濯に往つては腰を痛くし、それでも歸途には露の蒸なぞ見つけて、摘むで來ることを忘れなかつた。裨がけのまゝ、人に聞き、近在を買物に駆け歩いて、今日は斯様な處を歩きました、妙な處に店は出してない呉服屋がありましたと一々報告した。彼女は忽ち近隣の人々と懇意になつた。墓地向ふの家の久

さんの子女が久さんを馬鹿にするのを見かねて、餘りでございませぬと訴へた。啞の子巳代吉とは殊に懇意になつて、手眞似で始終話して居た。啞との交渉はとめやに限ると主人夫婦は云ふた。馬鈴薯を買ふて來ることを巳代公に頼むと云つて、とめやが鍬で地を掘る眞似をして、指で圓いものを拵へて見せて、口にあて、食ふさまをして、東を指し北を指し、巳代公が頷いたと云つて納まつて居ると、巳代公は一時間経つても二時間経つてもやつて來ぬので、往つて見ると自分の事をして居たので、始めてとめやの早合點、巳代公が分からずに居た事が分かつて、一同大笑ひしたことがある。兎に角彼女の無我にして骨身を惜まぬ快活の奉仕は、主人夫婦の急激な境遇變化に伴ふ寂寥と不安とを如何ばかり慰めたか知れぬ。移轉の騒ぎも一型ついで、日日の生活もほゞ軌道に入つたので、彼女は泣く／＼東京に歸つた。妻も後影を見送つて泣いた。

三月の末東京に歸つて、五月中また薔など持つて訪ねて來た。翌年丁度引越しの

一周年に、彼女はまた手土産を持つて訪ねてくれた。去年歸西して、昨日江州から上京したばかりだと云つた。四日程逗留して、臺所をしたり、裁縫を手傳つたり、折から不元氣で居た妻を一方ならず助けて往つた。其翌年の春、彼女は同郷の者で姓も同じく商賣も兄のと似寄つた男に縁づいたことを知らして來た。秋十月の末、ある日丸鬚に結つた血色の好い若いおかみさんが尋ねて來た。とめやであつた。名も絹とあらためて、立派なおかみさんになつて居た。夫妻共稼ぎで中々忙しいと云つた。其れから東京では正直な人を得難いことをかこつて、誰か好い子僧はあるまいかなぞ折から居合はした懇意の太工に聞いて居た。彼女の話の中に一つ面白い事があつた。ある時兩國橋の上で彼女は四十あまりの如何にも汚ない風をした立ん坊に會ふた。つく／＼其顔を見て居た彼女は、立ん坊に向ひ、好い仕事があるかと聞いた。立ん坊は無いと答へた。橋の上に立つて居るよりわたしの家に來て商賣の手傳をしないかと云ふた。立ん坊も彼女の顔を見て居たが、手傳しませうと云ふた。

とめやのきぬやは早速立ん坊を連れて良人に引合はせ、翌日から車を挽かせて行商に出したが、立ん坊君正直に働いて双方喜んで居る云々。此話は非常に舊主人夫婦を悦ばした。あの温順しい女にも、中々潤達な所がある、所謂近江商人の血が流れて居る、とあとで彼等は語り合つた。

彼女は其時己に六月の身重であつた。今年の春男子を擧げたと云ふたよりがあつた。今日の其計は實に突然である。

彼女の臨終は如何であつたらうか。當歳の子と夫を残して逝く彼女は嘸残念であつたであらう。然し彼女自身は朝に生れて夕に死すとも憾みは無い善良の生涯を送つて居たので、生の目的は果した。彼女の實家は佛教の篤信者で、彼女の伯母などは南無阿彌陀佛を唱へつゝ、安らかな大往生を遂げた。彼女にも其血が流れて居る。謙遜な奉仕の天使、彼等が我等と共に在るの日、高慢な我等は微笑を以て其弱點を見つゝ、十分に尊敬を拂はず、當然の事の如く座ながらにして其心盡しの奉仕を受

け易い。彼等が去るの日に於て、我等は今更の如く其人と其働の意味を知り得て、あらためて感謝と慚愧を感ずるのである。

命がけ

昨夜は烈しく犬が騒いだ。

今朝起きて見ると、裏庭の梧桐の下に犬が一疋横になつて居る。寝たのかと思ふと、死んで居るのであつた。以前時々内のピンに通つて来た狐見た様な小柄の犬だ。デカが噛み殺したと見える。

裏のはなれに泊つて居るA君の話によれば、昨夜ピンを張りに来た此犬を、デカがはなれの縁の下に追ひ込んで、足を啣へて引きずり出し、而して睾丸を啣へて體をドシ／＼と大地に投げつけた。A君が餘程引きはなさうと骨折つたが、デカが如何しても放さなかつたと云ふ事である。

此邊には牝犬が少ないので、春秋の交尾期になると、猫程しかないピンを目がけ

て、来るは／＼、白君、斑君、黒君、虎君、ポインター君、スパニール君、美君、醜君……婿八人どころの騒ぎではない。デカも昨春までは、其一人であつたが、抜群の強猛故に競走者を追拂つて、押入婿になり済ましたのである。今は正規の夫婦顔して、凡そ眼の届かん限り、耳の聞かん限り、一切の雄犬を屋敷の内へは入れぬ。其目一たび雄犬の影を見やうものなら、血相變へて追拂ふ。宛ながら足の四本に止まるを憾むが如く、一口に他の犬を喰ふてしまふことが出来ぬを悲しむ如く、醜の壯夫デカ君が悲鳴をあげつ、追駈ける。其時はピンもさながらデカに義理を立てるかか、横合からワン／＼吠えて走つて行く。

最初飼つた「白」は弱虫だつたので、交尾期には他の強い犬に噛まれて、毎に血だらけになつた。デカは強いので、滅多に敗は取らぬ。然し其悲鳴して他の雄犬を追かける聲は、世にも情無げな、苦痛其もの、聲である。弱い者素より苦み、強い者がまた苦む。生物は皆苦む。思ふに慘ましく、見るに淺ましい。然し此れが自然

の約束である。即ち命を捨て、も命は自己を傳へずには措かぬ。
都々逸氏歌ふて曰く、

色のいの字と命のいの字

そこで色事命がけ

生殖は命がけ。嫉妬は必死。遊戯で無い。

命がけで入り込んで、生殖の爲に一命を果した彼無名犬の死骸を、樺の根もとに葬つた。向ふの方には、二本投げ出した前足に頭をのせて、頬杖つくくと云ふ見得でデカがけろりとして眺めて居た。

二時間の後、用達に上高井戸に出かけた。八幡の阪で、誰やら服脛を後から窃と押す者がある。ふつと見ると、烏山の天狗犬が、前足を舉げて彼の脛を窃と撫でて彼の注意を牽いたのである。此犬はあまり大きくもないが、金壺眼の意地悪い悪相

をした犬で、滅多に恐怖と云ふものを知らぬ鶴子すら初めて見た時は魔えて泣いた。「白」が居た頃、此犬は毎に善良な「白」を窘め、「白」を誘惑して共に隣家の猫を噛み殺し、到頭「白」を遠方にやるべく餘儀なくした、云はゞ白の敵である。白の主人の彼は此犬を憎むで、打殺さうとしばしば思つた。デカが来ぬ間は、此犬もピンに通ふて来た犬の一つであつた。其犬すら雌犬のピン故に、ピンの主人の彼に斯く媚びるのである。甚あはれになつた。天狗犬は訴ふる様な眼付をしてしばしば彼を見上げ、上高井戸に往つて復るまで、始終彼にくつついて歩いた。歸つて家近くなると、天狗犬はデカを恐れて、最早跟いて來なかつた。ピンの主人を見送つて、悄然と櫟の下の徑に立て居つた。

先日行衛不明で、若來たら留めて置いてくれと照會があつた角谷の消息が分かつた。彼は十八日の夜、大森停車場附近で鐵道自殺を遂げたのである。

彼オトナしい角谷、今年十九の彼律義な若者が——然し此驚きは、我迂濶と淺薄を證據立てるに過ぎぬ。

角谷は十三四の年地方から出京して、其主人は親類筋に當る某書店に奉公した。美的百姓が「寄生木」を出す時、角谷は其校正を持つて銀座と柏谷の間を自轉車で數十回往復した。著者が校正を見る間に、彼は四歳の女兒の遊び相手になつたり、根が農家の出身だけに、時には鍬取りもしてくれた。ルビ振りを手傳へと云ふたら、頭を搔いて尻ごみした。眉の濃い、眼の可愛い、倔強な田舎者らしい骨格をしながら色の少し蒼い、眞面目な様で頓興な此十七の青年と、著者の家族は大分懇意になつた。角谷は自分の巾着から女兒に鼠の畫本など買つて來た。一度日本橋で、著者の家族三人、電車満員で困つて居ると、折から自轉車で來か、つた彼が見かけて、自轉車を知邊の店に預け、女兒を負つて新橋まで來てくれた。去年の夏の休には富士山頂から晝はがきをよこしたりした。

來たら留めて置いてくれとののがきに接した時、いさゝか不審に思ひは思ひながら、まさか彼が生を見捨てやうとは思はなかつた。

角谷は十二日から三日間、例によつて夏休をもらふた。十一日に貯金の全部百二十圓を銀行から引出し、同店員で従兄に當る若者宛の遺書を認め、己がデスクの抽斗に入れた。其の遺書には、自分は十九歳を一期として父の許へ行く——父は前年郷里で死んだ——主人には申譯が無いから君から宜しく云ふてくれ、荷物は北海道に居る母の許に送つてくれ、運賃として金五圓封入して置く、不足したら店員某に七十二錢の貸しがあるから、其れで拂つてくれ、と書いてあつた。

十二日には、主人の出世を待つて、暇乞して店を出で、麻布の伯父の家を訪ふて二階に上り、一時間半程眠つた。それから日比谷で寫眞を撮つて、夫人、伯父、郷里の兄、北海道の母に届く可く郵税一切拂つて置いた。日比谷から角谷は淺草に往つた。淺草公園の銘酒屋に遊ぶで、田舎出の酌婦に貯蓄債券をやらうかなど、戲談

を云つた。彼は製本屋の職工から淺草、吉原の消息を聞いて居たのである。

角谷の踪跡は此處ではたと絶えた。其れから一週間彼は何處を如何迷ふて歩いたか、一切分からぬ。

十八日の夜八時過ぎ、神戸發新橋行の急行列車が、角谷の主人の居に近い大森で一人の男子を轢いた。足は切れ、顔もメチャ／＼になつて居たが、濃い眉で角谷と分かつた。店を出る時白がすりを着て出たが、死骸は紺飛白を着て居た。百二十圓の貯金全部を引出した角谷の墓口には、唯一錢五厘しか残つて居なかつた。死骸は護謨草履を穿いて居た。護謨草履が欲しい／＼と角谷は云つて居たのであつた。

彼は久しく死ぬ／＼と云つて居た。死ぬ／＼と云つて死ぬ者はないものだ、貯金など精出して死ぬ者があるか、と他の店員が笑ふと、死ぬ前には奇麗に使つて仕舞ふと角谷は戲談の様に云つて居た。角谷は手が器用で、書籍の箱造り荷拵へなどがうまかつた。職人になればよかつた、と自身もしばしばこぼして居た。

角谷は十九であつた。店は耶蘇教主義であるが、角谷は夜毎の家庭祈禱會などに出るのを厭がつて居た。彼の本箱には、梅曆や日本譯のマウパッサン短篇集が入つて居た。

謎は自づから解ける。

エデキンドが「春の目ざめ」のモリツツを想はずに居られぬ。

夜、外の闇から火光を眼がけて猛烈にカナブンが飛んで来る。ばたんばたと障子にぶつかる音が、礫の様だ。掴むでは入れ、掴むでは入れて、サイダアの空瓶が忽一ぱいになつた。

曉齋畫譜

重田さんが立寄つた。重田さんは隣字の人で、気が少し變なのである。躁暴狂でもなく、憂鬱狂と云ふ譯でもなく、唯家業の農を抛擲してぶらぶら歩いて居る。美的百姓が遊び人であるためか、時々音づれる。

今日も立寄つた。挨拶が斯うだ。

「え、私は、晩寝郡、早起村、濡垂拭兵衛と申しますが、その、私の弟が發狂致しまして……」

くどくど一言三言云ふかと思ふと、「それじやまた」とお辭義をして往つてしまつた。「弟が發狂した」が彼の口癖である。弟とは蓋夫子、自道ふのであらう。

重田さんの影が消ゆると、安達君の顔が歴々と主人の頭に現はれた。

安達君は醫學士で、紀州の人であつた。

紀州は蜜柑と謀叛人の本場である。紀州灘の荒濤が鬼が城の巖巖にぶつかつて微塵に碎けて散る處、鬱々とした熊野の山が胸に一物を藏して黙して居る處、秦始皇に體のよい謀叛した徐福が移住して來た處、謀叛僧文覺が荒行をやつた那智の大瀑が永久に漲り落つ處、雄才霸氣まかり違へば宗家の天下を一もぎにしかねまじい南龍公紀州頼宣が蟲を抑へて居た處、此國には昔から一種熬々した不穩の氣が漂ふて居る。明治になつても、陸奥宗光を出し、大逆事件にも此處から犠牲の一人を出した。安達君は此不穩の氣の漂ふ國に生れたのである。

余が始めて君を識つた時、君はまだ醫科大學に居た。小説「黒潮」の卷頭辭を見て、苟くも見たる者に對して、甚無禮と詰問の手紙をよこした。君自身見であつた。間もなく相見た時は、君もや、心解けて居たが、茶色の眼鏡く眉峻しく、熬々した其顔は、一見不安の念を余に起さした。君は醫學を専門にして居たが、文藝を好み

高山樗牛の崇拜者で、兄弟打連れて駿州龍華寺に樗牛の墓を弔ふたりした。君の親戚が當時余の僑居と同じく原宿にあつたので、君はよく親戚に来るついでに遊びに来た。親戚の家の飼犬に噛まれて、用心の爲數週間芝の血清注射に通ふたなぞ云つて居た。君はまた余に惺々曉齋の畫譜二卷を呉れた。惺々曉齋は平素猫の様につき、ましいい風をしながら、一旦酒をあふると鬱憤ばらしに狂態百出當る可からざるものがあつた。畫帖の畫も、狸が龜を押しころがしてヂツと前足で押さへて居たり、蛇が羽たく雀をわんぐりと啣へて居たり、大きな猫が寝そべりながら凄い眼をしてまだ眼の明かぬ子鼠の群を睨むで居たり、要するに熬々した頭の狀態が紙の一枚毎にまざくと出て居た。安達君の贈物だけに、一種の興味を感じた。

君は其年醫學士になつて郷里紀州に歸り、妻を迎へ子をまうけ、開業醫の生活をして居た。

余が千歳村に引越した其夏、遊びに来た一學生をちと沒義道に追拂つたら、學生

は立腹して一はがき五拾錢の通信料をもらはる、萬朝報の文界短信欄に福富源次郎は發狂したと投書した。自分は可なり正氣の積りで居たが、新聞なるもの、平氣に譎をつく事をまだよく知らぬ人達の間には大分影響したと見え、見舞やら問合せの手紙はがきなどいくらか來て、余は自身で自身の正氣を保證す可く餘儀なくされた。ある日、庭で覺束ない手つきをして小麥を扱いて居ると、入口で車を下りて洋装の紳士が入つて來た。余は眼を舉げて安達君を見た。安達君は彼萬朝報の記事を見て、余を見舞にわざと東京から來てくれたのであつた。君は余の不相變ぼんやりして麥扱きをして居るのを見て、正氣だと鑑定をつけたと見え、來て見て安心したと云つた。而して此れから北海道の増毛病院長となつて赴任する所だと云つた。妻子は？ときいたら、はつきりした返事をしなかつた。

北海道から林檎やら歌やら送つて來た。病院長の生活は淋しいものらしかつた。家庭の模様を聞いてやつても、其れだけは何時もお茶を濁して來た。余は

北の國五百重につもる白雪も

埋みは果てし胸の焔を

譯の分からぬ歌など消息の端にかきつけた。

間もなく君はまた郷里紀州に歸つた。而して相變らず醫を業としつゝ、其熬々を漏す爲に「濱ゆふ」なぞ云ふ文學雜誌を出したり、俳句に凝つたりして居た。曾て夏蜜柑を贈つてくれた。余は

紀の國のたより来る日や風薫る

斯様な悪句を書いて酬ふた。或時君の令弟が遊びに來た。聞けば、細君は別居して、家庭はあまり面白くもなさゝうだが、遠隔の地突込むで聞きもならず、其まゝに打過ぎた。

梅雨季は誰しも發狂しさうな時節だ。安達君から、

梅霖霽々、憂愁如水

などはがきに書いて來た。

翌年の春、突然他の紀州の人から安達君が發狂して自殺したと知らして來た。驚いて令弟宛に弔状を出したら、其れと行き違ひに先の人から、安達君は短刀で自殺しかけたが、負傷したまゝ、で人に止められたと云つて、紀州の新聞を一枚送つて來た。其れには安達君の直話として、苟も書を読み理義を解する者が、此様な事を仕出來して、と恥ぢて話して居た。

余は慰問状を出した。其れが紀州に届いたと思ふ頃、令弟から安達君は到頭先度の傷の爲に亡くなつた、と知らして來た。

安達君は余の發狂を見舞に來てくれたが、余は安達君の病原に觸るゝことが出來なかつた。

記念の曉齋畫譜は大切に藏つて居る。

落穂の搔き寄せ



門

門

デデン

一月一日

七時起床。戸を開けば、霜如雪。裏の井戸側に行つて、素裸になり、釣瓶で三
ばい頭から水を浴びる。不精者の癖で、毎日の冷水浴をせぬかはり、一年分を元朝
に済ませようと謂ふのである。

戸、窓の限りを明け、それから鶏小屋の開闢。

畑に出て紅い實付の野茨一枝を剪つて廊下の釣花瓶に活け、蕾付の白菜一株を採
つて、旅順の記念にもらつた砲弾信管のカラを内筒にした竹の花立に挿し、食堂の
六疊に飾る。舊臘珍らしく暖だつたので、霜よけもせぬ白菜に蕾がついたのである。
十時過ぎ、右の食堂で家族打寄り、梅干茶一碗、枯露柿一個。今日此家で正月を

迎へた者は、主人夫妻、養女、舊臘から逗留中の秋田の小娘、毎日仕事に来る片眼のかみさん。猫のトラ、犬のデカ、ピン、小犬のチョン、クマ、鶏が十五羽。十一時難煮。東京仕入の種物澤山で、頗うまい。長者氣どりで三碗代へる。尤も餅は唯三個。

朝は晴、やがて薄曇つて寒かつたが、正午頃からまた日が出て暖になつた。自家は正月元日でも、四圍が十二月一日なので、一向正月らしい氣もちがせぬ。年賀に往く所もなく、來る者も無い。

デデンがぶらりと遊びに來た。デデンは啞の巳代吉が事である。啞で口が利けぬが、挨拶をする場合には、デデンと云ふ聲を出す。彼は姦淫の子である。戸籍面の父は痴で、母は莫連者、實父は父の義弟で實は此村の櫟林で拾はれた捨子である。捨てた父母は何者か知らぬが、巳代吉が啞ながら心靈手巧職人風のイナセな容子を

見れば、祖父母の何者か想像されぬでもない。巳代吉は三歳までは口をきいた。ある日「おつかあ、お湯が呑みてえ」と呼んだきり啞となつた。何ものが彼の舌を縛つたか。同じ胤と云ふ彼の弟も盲であるのを見れば、梅毒の遺傳もあらう。父母の心の咎も與つて力あるかも知れぬ。兎に角彼は啞になつた。

「イエス行く時、生來なる替を見しが、其弟子彼に問ふて曰ひけるは、ラビ、此人の替に生れしは誰の罪なるや、己に由るか、又二親に由るか。イエス答へけるは、此人の罪に非ず、亦其二親の罪にもあらず、彼に由て神の作爲の顯はれん爲也。此事を言ひて地に唾きし、唾にて土を和き、其泥を替者の目に塗り、彼に曰ひけるは、シロアムの池に往きて洗へ。彼則ち往きて洗ひ、目見ることを得て歸れり。」

耶蘇程の靈力があるなら、巳代吉の啞は屹度癒る。年來眼の前に日々此巳代吉に現はる、謎を見ながら、哀しいかな不信輕薄の余には、其謎を解き其舌の縛を解く能力が無い。彼がデデンと呼んで來れば、デデンと應ずるまで、ある。

淋しい元日であつた。

あまり淋しいので、夜隣家の人々を案内にやつたら、皆浪花節に出かけて留守だつた。

(明治四十四年)

芝生の上

正月に入つて、連日美晴。

庭を歩くと、吹くともない風が冷やり／＼顔を撫でる。日はほか／＼と暖かい。杉は鶯色になり、松は微黄を帯び、裸になつた楓の枝には、四十雀が五六羽、白頬の黒頭を傾げて見たり、ヒヨイ／＼と枝から枝に飛んだりして居る。地藏様の影が薄すら地に落ちて居る。

デカとピンとチヨンが、白茶のフラシ天の敷物を敷きつめた様な枯れて乾いた芝生に悠々と寝そべり、満身に日を浴びながら、遊ぶで居る。過去は知らず、将来は知らず、現在の彼等は幸福である。幸福な彼等を眺めて楽しむ主人も、不幸な者とは云はれない。

勝手の方で、飯をやる合圖の口笛が鳴つたので、犬の家族は匆ね起きて先を争ふて走つて往つた。主人はやをら下駄をぬいで、芝生の真中に大の字に仰臥した。而して一鳥過ぎらず片雲駐まらぬ淺碧の空を、何時までも何時までも眺めた。

(明治四十五年一月十日)

小鳥

芝生を焼く。

水島生が来た。社會主義神髓を返へし、大英遊記を借りて往つた。林の中で拾つたと云つて、彈痕ある鶉を一羽持て来た。食ふ氣になれぬので、楓の下に埋葬。

銃獵は面白いものであらう。小鳥はうまいものである。此村にはあまり銃獵に来る都人士もないので、小鳥は可なり多い。ある日庭を歩いて居ると、突然東の方から嵐の様な羽音を立て、夥しい小鳥の群が悲鳴をあげつ、裏の雑木林に飛むで来た。と思ふと、やがて銃聲がした。小鳥はうまいものである。銃獵は面白いものであらう。然しあの速しい羽音と、小さな心臓も破裂せんばかり驚きおびえた悲鳴を聞いては……

午後鳥打帽子をかぶつた丁稚風の少年が、や、久しく門口に立つて居たが、思切つたと云ふ風で土間に入つて來た。年は十六、弟子にして呉れと云ふ。縁の方へ廻れと云ふたら、障子をあけてスンスン入つて來たから、縁から突落して馬鹿と叱つた。もと谷中村の者で、父は今深川で石工、自身はボール箱造つて、向ふ賄で月六圓とるさうだ。小説家などになるものでない、と云つて聞かして、干柿を三つくれて歸へす。

(明治四十二年 一月十七日)

炬燵

雪がまだ融けぬ。

夜、二疊の炬燵に入つて、架上の一冊を抽いたら、「多情多恨」であつた。器械的に頁を翻して居ると、つひつり込まれて読み入つた。ふつと眼を上げると、向ふには鶴子が櫓に突伏して好い氣もちにスヤ／＼寝て居る。炬燵の上には、猫が咽も鳴らさず巴形に眠つて居る。九時近い時計がカチ／＼鳴る。臺所では細君が皿の音をさして居る。

茫々たる過去と、漠々たる未來の間に、斯一瞬の現今は楽しい實在であらう。またさら／＼と雪になつた。

余は多情多恨を読みつゞける。何と云ふても名筆である。柳之助が亡妻の墓に雨

がしよぼく降つて居たと葉山に語る條を讀むと、青山墓地にある春日燈籠の立つた紅葉山人の墓が、突と眼の前に現はれた。忽ち其墓の前に名刺を置いて落涙する一青年士官の姿が現はれる。それは寄生木の原著者である。あゝ其青年士官——彼自身最早故山の墓になつて居るのだ。

皆さつさと過ぎて行く。

「御徐に！」

斯く云ひたい。

何故人生は斯うさつさと過ぎて往つて了ふのであらう？

(明治四十二年 一月二十二日)

蓄音器

あまり淋しいので、昔は嫌ひなもの、一にして居た蓄音器を買つた。無喇叭の小さなもので、肉聲をよく明瞭に傳へる。呂昇、大隅、加賀、寶生、哥澤、追分、磯節、雑多なものが時々余等の耳に刹那の妙音を傳へる。

あたりが静なので、戸をしめきつても、四方に餘音が傳はる。蓄音器があると云ふ事を皆知つて了ふた。そこで正月には村の若者四十餘名を招待して、蓄音器を興行した。次ぎには平生世話になる耶蘇教信者の家族を招待した。次ぎには畑仕事で始終厄介になる隣字の若者等を案内した。今夜は村の婦人連を招いた。生憎前日來の雨で、到底來者はあるまいと思ふて居ると、それでも傘をさして夕刻から十數人の來客。

妻と鶴子と逗留中の娘とが席に出て取持つ。

余は母屋の爐を擁して、書を見ながら時々書院のさゞめきに耳傾ける。一曲終る毎に、入り亂れたほめ言葉が聞こえる。曲中ながら笑聲が起る。二時間ばかりも過ぎた。茶菓が運ばれた。やがて誰やらクドク言ふ様子であつたが、音譜の中には聞き覚えのない肉聲が高々と響き出した。

余は窃と廊下傳ひに書院に往つて、障子の外に停んだ。蓄音器が歌ふのではない、田圃向ふのお琴婆さんが歌ふのである。

田圃向ふの濱田の源さんの母者は、余の字で特色ある人物の一人である。彼女は神道大成教の熱心な信者で、あまり大きくもない屋敷の隅には小さな祠が祭つてあつて、今でも水垢離とつて、天下泰平、國土安穩、五穀成就、息災延命を朝々祈るのである。彼女は村の生れでなく、噂によればさる士の藝妓に生ませた女らしい。其信心は何時から始まつたか知らぬが、其夫が激烈な脚氣にかゝつて已に衝心した

時、彼女は身命を擲つて祈つたれば、神のお告に九年餘命を授けるとあつた。果然然夫の病氣は疊の目一つづつ漸々快方に向つて、九年の後死んだ。顔の蒼白い、頬骨の高い、眼の凄い、義太夫語りの様な鏗聲をした婆さんである。「折目高なる武家挨拶」と云ふ様な切口上で挨拶をするのが癖である。今日も朝方蓄音器招待の禮に、季節には珍らしい筈二本持て来てくれた。

琴婆さんは蓄音器の返禮にと云つて、文句は自作の壽を唄ふて居る。

「福富サンが、皆を集めて遊ばせて下さるウ……(如何も聲が出ないものですから、エヘン、エヘン——ウーイ、ウーイ、ウーイ)……御親切な福富さんの(ウーイ、ウーイ)ますく御繁昌で(ウーイ、ウーイ)表の方から千兩箱、右の方から寶船(ウーイ、ウーイ)……」

障子の外に立聞く主人は、冷汗が流れた。彼は窃とぬき足して母屋に歸つた。唄はまたついで、(ウーイ、ウーイ)が Refrain の様に響いて来る。(明治四十五年二月六日)

春七日

(一) 雛節句

三月三日。別に買った雛も無いから、細君が鶴子を相手に紙雛を折つたり、色紙の鶴、香箱、三方、四方を折つたり、あらん限りの可愛いものを集めて、雛壇を飾つた。

草餅が出来た。蓬は昨日鶴子が夏やと田圃に往つて摘んだのである。東京の草餅は、染料を使ふから、色は美しいが、肝腎の香が薄い。

今朝は非常の霜だつた。午の前後はまた無闇と暖で、急に梅が咲き、雪柳が青く芽をふいた。山菜萁は黄色の花ざかり。赤い蕾の沈丁花も一つ白い口を切つた。春蘭、水仙の蕾が出て来た。

雲雀が頻に鳴く。麥畑に陽炎が立つ。

啞の巳代吉が裸馬に乗つて来た。女子供がキャツ／＼騒ぎながら麥畑の向ふを通る。若い者が大勢大師様の参詣に出かける。

春だ。

戀猫、戀犬、鶏は出しても／＼巢につき、雀は夫婦で無暗に人の家の家根に穴をつくり、木々は芽を吐き、花をさかす。犬のピンの腹ははりきれさうである。

夜は松の心芽程の小さな蠟燭をともし、雛壇が美しかった。

(二) 春雨

三月六日。

盡日雨、山陽の所謂「春雨さびしく候」と云ふ日。

書窓から眺めると、灰色をした小雨が、噴霧器で噴く様に、弗——弗と北から中

ツ原の杉の森を掠めて斜に幾しきりもしぶいて通る。

つく／＼見て居る内に、英國の發狂詩人ワットソンの God comes down in the rain 神は雨にて降り玉ふ、と云ふ句を不圖憶ひ出した。其れは「田舎の信心」と云ふ短詩の一句である。全詩は忘れたが、右の句と、「此處田舎の村にては、神を信賴の一念今も尙存し」と云ふ句と、結局の「此れぞ田舎の信心なる、此れに越すものあらめやも」と云ふ句を覚えて居る。

農村に天道様の信心が無くなつたら、農村の破滅である。然るに此信心は日に日に消亡して、人智人巧唯我唯利の風が日々農村人心の分解を促しつゝあるのだ。少しでも農村の實情を見知る者は、前途を懸念せずには居られぬ。

(三) 雨後

三月七日。

近來よく降る。降らなければ曇る。所謂養花の天。

今日は日が出た。朝から暖だ。鶏の聲が殊に長閑に聞こえる。昨日終日終夜の雨で、畑も土も眞黒に潤ふた。麥の緑が目立つて濃うなつた。緑の麥は、見る眼の驪喜である。其れが嫩らかな日光に笑み、若くは面を吹いて寒からぬ程の微風にソヨグ時、或は夕雲の翳に青黒く黙す時、花何ものぞと云ひたい程美しい。

隣家では最早馬鈴薯を植ゑた。

午後少し高井戸の方を歩く。米俵を積んだ荷馬車が来る。行きすりに不圖目にとまつた馬子の風流、俵に白い梅の枝が挿してある。白い蝶が一つ、黒に青紋のある蝶が一つ、花にもつれて何處までもひらひら飛んで跟いて行く。馬子は知らずによく聲を張り上げて、

「飲めよ、ネエ、騒げエよ、三十がア止ウめエよウ。三十過ぎればア、たゞの人ウ。コラ／＼」

朝の模様で、今日は美晴と思はれたが、矢張氣の定まらぬ日であつた。時々ざあ
と時雨の様に降つては止み、東に虹が出たり、西に日が現はれて遠方の屋根が白く
光つたり、北風が来て田圃の小川の縁とる女竹の藪をざわ／＼鳴らしてはきら／＼
日光を跳らせたりした。空の一部は印度藍色に濃く片曇りし、村と緑の麥の一部は
眩しい片明りして、ミレーの「春」を活かして見る様であつた。

(四) 摘草

三月八日。

今日も雲雀が頻に鳴く。

午食前に、夫妻鶴子ピンを連れて田圃に摘草に出た。田の畔の猫柳が絹毛の被を
脱いで黄ろい花になつた。路傍の草木瓜の蕾が朱にふくれた。花は兎に角、吾儕の
附近は自然の食物には極めて貧しい處である。芹少々、嫁菜少々、蒲公英少々、野

蒜少々、蕨の藁が唯三つ四つ、穫物は此れつきりであつた。

午後本を讀むで居ると、空中に大きな物の唸り聲が響く。縁から見上げると、夏
に見る様な白銅色の卷雲を背にして、南の空に赤い大紙鳶が一つ颯つて居る。ブラ
下げた長い長い二本の繩の脚を軟らかに空中に波うたして、紙鳶は心長閑に虚空の
海に立泳ぎをして居る。ブーンと云ふウナリが、武藏野一ぱいに響き渡る。

春だ。

晚食に摘草の馳走。野蒜の酢味噌は可、ひたし物の嫁菜は苦かつた。

(五) 彼岸入り

三月十八日。彼岸の入り。

風はまだ冷たいが、雲雀の歌にも心なしか力がついて、富士も鉛色に淡く霞む。
庭には沈丁花の甘い香が日も夜も溢れる。梅は赤い夢になつて、晚咲紅梅の蕾が

ふくれた。犬が母子で芝生にトチ狂ふ。猫が小犬の様に駆け廻る。

春だ。

彼岸入りで、團子が出来た。

墓参が多い。

夕方、静になつた墓地に往つて見る。沈丁花、赤椿の枝が墓前の竹筒や土に挿してある。線香の烟が徐かに颯つて居る。不圖見ると、地藏様の一人が紅木綿の着物を被て居られる。先月幼な娘を亡くした松さんここで被せ申したのであらう。

(六) 蛇出穴

三月二十八日。

近來の美晴。朝飯後高井戸に入つて、石を買ふ。武藏野に石は無い。砂利や玉石は玉川最寄から来るが、澤庵の重石以上は上流青梅方角から来る。一貫目一錢五厘

の相場だ。擇んだ石を衡にかけさせて居たら、土方體の男が通りか、つて眼を瞪り、

「石を衡にかける——驚いたな」と云つた。

午後は田圃傳ひに船橋の方に出かける。門を出ると、墓地で蛇を見た。田圃の小川の堰の下では、子供が鮒を釣つて居る。十丁そこら往つて見かへると、吾家も香爐の家程に小さく霞むで居る。

今日は夕日の富士が、晝にかいた「理想」の様に遠くて美しかった。

(七) 仲春

四月十七日。

戸を開けて、海——かと思ふた。家を繞つて鉛色の朝霞。村々の森の梢が、幽霊の様に空に浮いて居る。雨かと舌鼓をうつたら、霞の中からぼんやりと日輪が出て

来た。見る／＼日の威力は加はつて、光は白く霞に咽ぶ。

庭の櫻の眞盛りである。落葉松、海棠は十五六の少年と十四五の少女を見る様。

紫の箱根つゝじ、雪柳、紅白の椿、皆眞盛り。一重山吹も咲き出した。セイゲン、ヤシホなど云ふ血紅色、紅褐色の春モミヂはもとより、榊、楓、檜、櫻、ソロなどの新芽は、とり／＼に花より美しい。

畑に出て見る。唯一叢の黄なる菜花に、白い蝶が面白さうに飛むで居る。南の方を見ると、中つ原、廻澤のあたり、桃の紅は淡く、李は白く、北を見ると仁左衛門の大櫓が春の空を摩でつゝ、褐色に煙つて居る。

春の日も午近くなれば、大分青むで来た芝生に新楓の影繁く、遊びくたびれて二つ巴に寝て居る小さな母子の犬の黒光りする膚の上に、櫻の花片が二つ三つほろほろとこぼれる。風が吹く。木影が揺く。蛙が鳴く。一寸耳をびちつと動かした母犬は、またスヤ／＼と夢をつゞける。

夕方は、まんまるな紅い日が、まんぢりともせず悠々と西に落ちて行く。横雲が一寸一刷毛日の眞中を横に抹つて、晝にして見せる。最早穂を孕むだ青麥が夕風にそよぐ。

夜は蛙の聲の白い月夜。

ある夜

梅に晩く櫻に早い四月一日の事。

余は三時過ぎから、ある事の爲にある若い婦人を伴ふて、柏谷から高輪に往つた。午後の六時から十一時過ぎまで、ある家の主人を訪ふてある事を辯じつゞけ、要領を得ずして其家を辭した時は、最早十二時近かつた。それでも終電車に乗るを得て、婦人は三宅坂で下りて所縁の家へ、余は青山で下りて兄の家に往つた。

寝入り端と見えて、門を敲けど呼べど叫べど醒めてくれぬ。つい近所に姪の家があるが、臨月近い彼女を驚かすのも面白くない。余は青山の通を御所の方へあるいて、交番に巡查を見出し、其指圖で北町裏の宿屋を一二軒敲き起した。寤めは寤たが、満員と體の好い嘘を云つて謝絶された。

電車はとくに寢に往つて了つた。夜が明けたら築地の病院に腫物を病んで入院して居る父を見舞ふつもりで、其れ迄新橋停車場の待合室にでも往つて寢やうと、月明りと電燈瓦斯の光を踏んで、ぶら／＼溜池の通を歩いて新橋に往つた。往つて見ると此は不覺、扉がしまつて居る。驛夫に聞くと、睡むさうな聲して、四時半まではあけぬと云ふ。まだ二時前である。

電燈ばかり明るくてボンベイの廢墟の様に寂しい銀座の通りを歩いて東へ折れ、歌舞伎座前を築地の方へ往つた。萬年橋の袂に黙阿彌の芝居に出て來さうな夜啼餛鈍が居る。夜は丑滿頃で、薄寒くもあり、腹も減つた。

「おい、餛鈍を一つくれんか」

「へえ」

灯の蔭から六十近い爺が顔を出して一寸余を見たが、直ぐ團扇ではたばたやりはじめた。後の方には車が二臺居る。車夫の一人は駢をかいて居る。一人は蹴込に腰

を据ゑて、膝かけを頭からかぶつて黙つて居る。

「へえ、出来ました」

割箸を添へて爺が手渡す井を受取つて、一口啜ると、腥いダシでむかッと來たが、それでも二杯食つた。

「おい、もう二つこさへて呉れ」

余は代を拂ひ、「ドゥモ御馳走様！おい、旦那が下さるとよ」と車夫が他の一人を呼びさます聲を聞きすて、萬年橋を渡つた。つい其處の歌舞伎座の書割にある様な紅味を帯びた十一日の月が電線にぶら下つて居る。

築地外科病院の鐵扉は勿論しまつて居た。父のと思はる、二階の一室に、ひいた窓帷越しに樺色の光がさして居る。余は耳を澄ました。人のうめき聲がしたかと思ふたが、其は僻耳であつたかも知れぬ。父は熟睡して居るのであらう。其子の一人が今病室の光を眺めて、此深夜に窓の下を徘徊して居るとは夢にも知らぬであらう。

睡くなつた。頭がしびれて來た。何處でもよい、此重い頭を横たへたくなつた。

余はうつらうつらと夢心地に本願寺の近邊をぶらついた。體で余は歩かなかつた。幽霊のやうにふら／＼とさまよふた。不圖墓地に入つた。此處は余も知つて居る。曾て一葉女史の墓を見に來た時歩き廻つた墓地である。余は月あかりに墓と墓の間を縫ふて歩いた。誰やらの墓の臺石に腰かけて見た。然し此處は永く眠るべき場所である。一夜の死を享く可き場所ではない。余は墓地から追ひ出されて、また本願寺前の廣場に出た。

不圖本願寺の門があいて居るのを見つけた。門口には巡查か門番かの小屋があつて、あかりがついて居る。然し誰咎むる者も無いので、突々と入つて、本堂の縁に上つた。大分西に傾いた月の光は地を這ふて、本堂の縁は闇い蔭になつて居る。やつと安息の場所を獲て、廣縁に風呂敷を敷き、手枕をして横になつた。少しウトウトするかと思ふと、直ぐ頭の上で何やらばさ／＼と云ふ響がした。余は眼を開いて

頭上の闇を見た。同時に闇の中に「ククク」と云ふ囁やきを聞いた。

「あ、鳩だ」

余はまたウト／＼となつた。

月は次第に落ちて行く。

(明治四十二年 四月一日)

與右衛門さん

村の三月節句で、皆が遊んである。家は潰され、法律上の妻には出て往かれ、今は實家の厄介になつて居る久さんが、何發心してか今日はまる／＼の青坊主に剃つて、手拭肩に獨ぶら／＼歩いて居る。

甲州街道の小間物屋のおかみが荷を背負つて來た。「ドウもねえあなた、天道様に可愛がられまして、此通り眞黒でございます」と頬を撫でる。氣の利いた口のきぶり、前半生に面白い話を持って居さうな女だ。負つてあるく荷は十貫目からあると云ふ。細君が鬢櫛と鶴子の花簪を買ふた。

小間物屋のおかみが歸ると、與右衛門さんが地所を買はぬかと云ふて來た。少しばかりの地面を買つて古い家を建てたりしたので、やれ地面を買はぬかの、古い天

水桶用の釜を買はぬかの、植木の賣物があるのと、蟻の砂糖につく如くたかつてくる。金が無いと云つても、中々本當にしてくれぬ。與右衛門さんも其一人である。

與右衛門さんは、村内切つての吾儘者剛愎者としてのけものになる、男である。

村内でも工面のよい方で、齡もまだ五十左右、がつしりした岩疊の體格、濃い眉の下に開いた蛇の目の様な二つの眼は鋭く見つめて容易に動かす、頭の頂邊から足の爪先まで慾氣満々として寸分のタルミも無い。岩疊な彼を容る、その家は、基礎を切石にし、柱の數を多くし、屋根をトタンで包み、縁を樺で張り、木造の鬼の窟の如く岩疊である。彼に屬する一切のものは、其堅牢な意志の發現である。彼が家の子女は何處の子女よりも岩疊である。彼の家の黒猫は、小さな犬より大きく、村内の如何なる猫も其威に恐れぬものは無い。彼が家の麥からの束は、他家の二倍もある。彼が家の夜具は、宇都宮の釣天井程に重く大きなものだ。彼が家の婆さんは、七十過ぎて元氣をさく、若者を凌ぐ婆さんである。婆さんの曰く、私の家は信心なんざ

しませんや。正に其通り、與右衛門さんは神佛なんか信ずる様な事はせぬ、徹頭徹尾自力宗の信者である。遠い神佛を信心するでもなければ、近所隣の思惑や評判を氣にするでもなく、流行とか外聞とかつき合とか云ふことは、一切禁物で、恃む所は自家の頭と腕、目ざすものは金である。與右衛門さんには道樂と云ふものが無いが、金と酒は生命にかけて好きである。家で晩酌に飲み、村の集會で飲み、有権者だけに衆議院議員の選舉振舞で飲み、どうやらすると晝日中おかしな小店の一人で飲んで眞赤な上機嫌になつて、笑つて無暗にお辭義をしたり、管を卷いたり、氣焰を吐いたりして居ることがある。皆が店を覗いて、與右衛門さんのお株梅ヶ谷の獨相撲がはじまりだ、と笑ふ。與右衛門さんは何處までも自己中心である。人が與右衛門さんの地所を世話すれば、世話人は差措いて必直談に来る。自身の世話しかけた地所を人が直談にすれば、一盃機嫌で怒鳴り込んで来る。

然し與右衛門さんは強慾であるかはり、彼は詐を云はぬ。詐は貨幣同様天下の通

り物である。都でも、田舎でも、皆それ／＼に詐をつく。多くの商賣は詐に築かれた蜃氣樓と云つてもよい。此邊の田舎でも、些とまとまつた買物を頼めば、賣主は頼まれた人に、受取は幾何金と書きませうか、ときどき。コムミツシヨンの天引は殆ど不文律になつて居る。人を見て値を云ふ位は、世にも自然な事共である。東京から越して來た人に薪を賣つた者がある。他の村人が、あまり値段が高いぢやないかと注意したら、賣り主の曰く、そりや些ア高いかも知んねえが、何某さんは金持だもの、此様な時にでも些ア儲うけさして貰はにや、と。而して薪の賣主は、衆議院議員選舉權を有つて居る、新聞位は讀むで居る男である。賣る葺萱の中に屑をつめ込んで束を多くする位は何でも無い。

誰も平氣に詐をつく。然し看板を出した慾張り屋の與右門衛さんは、詐を云はぬ、いかさまをせぬ。それから彼は作代に妻をもたせて一家を立て、やつたり、義弟が脚部に負傷したりすると、荷車にのせて自身挽いて一里餘の道を何十度も醫者へ通

つたり、よく縁者の面倒を見る。與右衛門さんに自慢話がある。東京者が杉山か何か買つて木を伐らした時、其木が倒れて誤つて隣合つて居る彼與右衛門が所有林の雑木の一本を折つた。最初無斷で杉を伐りはじめたのであつた。與右衛門さんは例の毛蟲眉をびりりとさせて苦情を持込むだ。御自分に御買ひになつた木を御伐りになるに申分は無いが、何故此方の山の木まで御折りになつたか、金が欲しくて苦情を申すでは無い、金は入りません、折れた木を元の様にして戴きたい。思ひがけない剛敵に出會して、東京者も弱つた。與右衛門さんは散々並べて先方を困らせぬいた揚句、多分の賠償金と詫言をせしめて、やつと不承した。右は東京者に打勝つた與右衛門さんの手柄話の一節である。與右衛門さんは、東京者に此手で行くばかりでなく、近所隣までも此の筆法で行く。そこで與右衛門さんを憚つて、其の地所の隣地に一寸した事をするにも、屹度わたりをつける。

與右衛門さんは評判の長話家である。鍬を肩にして野ら仕事の出がけに鉢巻とつ

て「今日は」の挨拶からはじめて、三十分一時間の立話は、珍らしくもない。今日も煙管をしまつては出し、しまつては出し、到頭二時間と云ふものぶつ通しに話された。與右衛門さんは中々の精力家である。「どうもダイ産としては地所程好いダイ産はありませんからナ」の百萬遍を聞かされた。

「でも斯様な時代もあつたですよ」と云つて、與右衛門さんは九度目に抽き出した煙管に煙草をつめながら、斯様な話をした。

此邊はもと徳川様の天領で、納め物の米や何かは八王子の代官所まで一々持つて往つたものだ。八王寺まではざつと六里、餘り面倒なので、田はうつちやつてしまへと云ふ氣になり、粕谷では田を一切烏山にやるから貰つてくれぬかと相談をかけた。烏山では、タゞでは貰へぬ、と言ふ。到頭馬貳駄に酒樽をつけて、やつと厄介な田を譲つた。

「嘘の様な話でさ。惜しい事さね、今ならば……」
と云つて、與右衛門さんは煙管の雁管をボンと火鉢にはたいて、今にも水が垂りさうな口もとをした。

(明治四十四年 四月三日)

五月五日

五月五日。日曜。節句。余等が結婚十九年の記念日。例によつて赤の飯、若芽の味噌汁。

朝飯すまして一家買物に東京行。東京には招魂祭、府中には大國魂神社の祭禮がある。甲州街道も東へ往つたり西へ來たり人通りが賑やかだ。新宿、九段、上野、青山と廻つて、歸途に就いたのが、午後四時過ぎ。東京は賑やかで面白い。賑やかで面白い東京から歸つて來ると、田舎も中々悪くない。西日に光る若葉の村々には、赭い鯉が緑の中からふわりと浮いて居る。麥の穂は一面白金色に光り、蛙鳴く田は紫雲英の紅を敷き、短冊形の苗代には最早嫩緑の針がぼつ／＼芽ぐむで居る。夕雲雀が鳴く。日の入る甲州の山の方から塵のまじらぬ風がソヨ／＼顔を吹く。府

中の方から大國魂神社の太鼓がドン／＼と遙に響いて來る。

歸宅したのが六時過ぎ。正面に見て眩しくない大きな黄銅色の日輪が、今しも橋場の杉木立に沈みかけた所である。

本當に日が永い。

留守に隣から今年も榎餅をもらつた。

留守に今一つの出來事があつた。橋本のいさちやんが、濱田の婆さんに連れられ、高島田、紋付、眞白に塗つて、婚禮の挨拶に來たさうだ。美しうござんした、と婢が云ふ。

いさちやんは此邊でのハイカラ娘である。東京のさる身分ある人の女で、里子に來て、貫はれて橋本の女になつた。橋本の嗣子が亡くなつたのだ、實弟の谷さんを順養子にして、いさちやんを妻はしたのである。余等が千歳村に越して程なく、時々遊びに來る村の娘の中に、垢ぬけした娘が居た。それがいさちやんであつた。彼

女は高等小學を卒へ、裁縫の稽古に通つた。正月なんか、庇髮に結つてリボンをか
けて着物を更へた所は、争はれぬ都の娘であつたが、それでも平生は平氣に村の娘
同様の仕事をして、路の悪い時は肥車の後押しもし、目籠背負つて茄子隠元の收穫
にも往つた。實家の母やマアガレットに結つて居る姉妹等が遊びに來ても、いさち
やんはさして恥ぢらう風情も無かつた。

田舎は淋しい。人が殖え家が殖えるのは、田舎の歡喜である。人が喰合ふ都會で
は、人口の増加は苦痛の問題だが、自然を相手に人間の戦ふ田舎の村では、味方の
人數が多い事は何よりも力で強味である。小人數の家は、田舎では慘なものだ。何
の家でも、五人六人子供の無い家は無い。この部落でも、鳴田や寺本のように屈強な
男子の五人三人持て居る家は、家も榮るし、何かにつけて威勢がよい。養蠶が重な
副業の此地方では、女の子も大切にされる。貧しい家が扶持とりに里子をとるばか
りでなく、有福な家でも里子をとる、それなりに貰つてしまふのが少なくない。其

ま、に大きくして、内の媳にするのが多い。所謂「蕾からとる花嫁御」である。一
家總勞働の農家では、主僕の間隔がない様に、實の娘と養女の間格別の差等は
ない。養はれた子女が大きくなつても、別に東京戀しとも思はず、東京に往つても
直ぐ田舎に歸つて來る。

都會に近い田舎の事で、何の家も多少の親類を東京に有つて居る。村の祭には東
京からも遊びに來る。農閑の季節には、田舎からも東京に遊びに行く。辰爺さんは
淺草に親類がある。時々遊びに行くが、歸ると溜息ついて曰く、全く田舎が好えナ、
淺草なンか裏が狭くて、雪隠に往つても鼻ア突つく、田舎に歸ると爽々するだ、親
類のやつが百姓は一日にいくら儲かるつてきくから、こちとらは帳面なンかつけや
しねえ、年の暮になりや足りた時は足りた、剩らねえ時は剩らねえんだ、つて左様
云つてやりましたよ、と。

東京に往けば、人間に負けます、と皆が云ふ。麥の穂程人間の顔がある東京で

は、人間の顔見るばかりでも田舎者はくたびれて了ふ。其處に電話の鈴が鳴る。電車が通る。自動車走る。號外が飛ぶ。何かは知らず滅多無性に忙しさうだ。斯様な渦の中に捲き込まれると、李兵衛太五作も足の下が妙にこそばゆくなつて、宛無し電話でもかけ、要もないに電車に飛び乗りでもせねば済まぬ氣になる。ゆつくりした田舎の時間空間の中に住み慣れては、東京好しといへど、久戀の住家では無い。だから皆歸りには欣々として歸つて来る。

田舎では、豊かな生計の家でも、女を東京に奉公に出す。女の奉公と、男の兵役とは、村の兩遊學である。勿論弊害もあるが、軍隊に出た男は概して話せる男になつて歸つて来る。いさちやんのお婿さんなども、日露戦争にも出て、何處やら垢ぬけのしたた在郷軍人である。奉公に出た女にも、東京に嫁入る者もあるが、田舎に歸つて嫁ぐ者が多い。何を云ふても田舎は豊かである。田舎に生れた者が田舎を戀ふばかりでなく、都に生れた者でも田舎に育てば矢張田舎が戀しくなる。

いさちやんも好い生涯を興へられた。

(明治四十五年)

紫雲英

午後の散歩に一家打連れて八幡山、北澤間の田圃に往つた。紫雲英の花盛りである。

此處は西鬱々とした杉山と、東若々とした雑木山の縁に圍まれた田圃で、遙北手に甲州街道が見えるが、豆人寸馬遠く人生行路の圖を見る様で、却てあたりの静けさを添へる。主人と妻と女兒と、田の畔の鬼芝に腰を下ろして、持參の林檎を嚙つた。背後には生温い田川の水がちよろ／＼流れて居る。前は畝から畝へ花毛氈を敷いた紫雲英の上に、春もや、暮近い五月の午後の日がゆたかに匂ふて居る。ソヨソヨと西から風が来る。見るかぎり桃色の漣が立つ。白い蝶が二つもつれ合ふてヒラ／＼と舞ふて居る。跟いて來た大きな犬のデカと小さなピンが、蛙を追つたり、何

かフツ／＼嗅いだりして、面白さうに花の海を踏み分けて、淡紅の中に凹い緑の線をつける。熟々と見て居ると、紅の歡樂の世に獨聖者の寂しげな白い紫雲英が、彼所に一本、此處に一株、眼に立つて見える。主人はやをら立つて、野に置くべきを我庭に移さんと白きを掘る。白い胸掛をした鶴子は、寧其美しきを撰んで摘み且摘み、小さな手に持ち切れぬ程になつたのを母の手に預けて、また盛に摘むで居る。主人は田川の生温い水で泥手を洗つて、鬼芝の畔に腰かけつゝ、紫雲英を摘む女兒を眺めて居る。ぼか／＼した暮春の日光と、目に映る紫雲英の温かい色は、何時しか彼をうつとりと三十餘年の昔に連れ歸るのであつた。

時は明治十年である。彼は十歳の子供である。彼の郷里は西郷戦争の中心になつた。父は祖父を護して遠方に避難し、兄は京都の英學校に居り、家族の中で唯一人の男の彼は、母と三人の姉と熊本を東南に距る四里の山中の伯父の家に避難した。山櫻も散つて筈が出る四月の末、熊本城の圍が解けたので、避難の一家は急いで歸

途に就いた。伯父の家から川に添ふて一里下れば木山町、二里下ると沼山津村。今夜は沼山津泊の豫定であつた。皆徒歩だつた。木山まで下ると、山から野に出る。彼等は川堤を水と共に下つて往つた。堤の北は藻隠れに鮎の住む川で、堤の南は一面の田、紫雲英が花毛氈を敷き、其の絶間々には水鏡が茜色の水蓋をして居た。行く程に馬上の士官が來た。母が日傘を横にして會釋し、最早熊本に歸つても宜しうございませうかと云ふた。宜いとも／＼、皆ひどい目に會つた喃、と士官が馬上から挨拶した。其處に土俵で築いた臺場——堡壘があつた。木山の本營を引揚げる前、薩軍が據つて官軍を拒いだ處である。今は附け劍の兵士が番して居た。會釋して一同其處を通りかゝると、蛇が一疋のたくつて居る。蛇嫌ひの彼は、色を變へて立どまつた。兵士が笑つて、銃劍の先で蛇をつゝかけて、堤外に抛り出した。無事に此關所も越して、彼は母と姉と嬉々として堤を歩むだ。春の日はばかり／＼春の水はのたり／＼、堤外は一面の紫雲英で、空には雲雀、田には蛙が鳴いて居る。明

日家に歸る前に今夜泊る沼山津の村は、一里向ふに霞むで居る。……
「阿父、ほら此様に摘むでよ」
吾に復へつた彼の眼の前に、兩手につまむで立つた鶴子の白胸掛から、花の臙脂がこぼれさうになつて居る。

(明治四十四年 五月八日)

印度洋

夜、新聞で見ると、長谷川二葉亭氏が肺病で露西亞から歸國の船中、コロムボと新嘉坡の間で死んだとある。去十日の事。

馬琴物から雪中梅型のガラクタ小説に耽溺して居た余に、「浮雲」は何たる驚駭であつたらう。余ははじめて人間の解剖室に引ずり込まれたかの如く、メスの様な其筆尖が唯恐ろしかつた。それからツルゲーネフの翻譯「あひゞき」を國民の友で、「めぐりあひ」を都の花で見た時、余は世にも斯様な美しい世界があるかと嘆息した。繰り返へし讀んで足らず、手づから寫したものだ。其後「血笑記」を除く外、翻譯物は大抵見た。「其面影」はあまり面白いとも思はなかつた。「平凡」は新聞で半分から先きを見た。浮雲の筆は枯れきつて、ばつちり眼を明いた五十男の皮肉と

鋭利と、醒めきつた人のさびしさが犇々と胸に迫るものがあつた。朝日から露西亞へ派遣された時、余は其通信の一行も見落さなかつた。通信の筆は數回ではたと絶えた。而して歸朝中途の死！

印度洋はよく人の死ぬ所である。昔から船艦の中で死んで印度洋の水底に葬られた人は數知れぬ。印度洋で死んだ日本人も一人や二人では無い。知人柳房生の親戚某神學士も、病を得て英國から歸途印度洋で死んで、新嘉坡に葬られた。二葉亭氏も印度洋で死んで新嘉坡で火葬され、骨になつて日本に歸るのである。

高山の麓の谷は深い。世界第一の高峻雪山を有つ印度の洋は、幾千の人の死體を埋めても埋めても埋めきれぬ。其陸の菩提樹の蔭に「死の宗教」の花が咲いた印度の洋は、餌を求めて墜くことを知らぬ死の海である。烈しい暑さのせいもあらうが、印度洋は人の氣を變にする。日本郵船のある水夫は、コロムボで氣が變になり、春晝など水夫部屋に飾つて拜んだりして居たが、到頭印度洋の波を分けて水底深く沈

んで了ふた、と其船の人が余に語り聞かせた。印度洋の彼不可思議な色をして千劫萬劫已む時もなくゆらめく謎の様な水面を熟々と見て居れば、引き入れられる様で、吾れ知らず飛び込みたくなる。

三年前余は印度洋を東から西へと渡つた。日々海を眺めて暮らした。海の魔力が次第に及ぶを感じた。三等船客の中に、眼が悪いので歐洲廻りで渡米する一青年があつて「思出の記」を持って居た。ベナンからコロムボの中間で、余は其思出の記を甲板から印度洋へ抛り込んだ。思出の記は一瞬の水煙を立て、印度洋の底深く沈んで往つたやうであつたが、彼小人菊池慎太郎が果して往生したや否は疑問である。印度洋は妙に人を死に誘ふ處だ。

(明治四十二年 五月十二日)

自動車

九十一歳の父と、八十四歳の母と逗留に來ると云ふ。青山から人力車では、一時間半はかゝる。去年までは車にしたが、今年は今少し樂なものをと考へて、到頭以前睥睨して居た自動車をとることにした。實は自身乗つて見たかつたのである。

自動車は余の嫌ひなもの、一である。曾て溜池の演伎座前で、微速力で駆けて來た自動車を避けおくれ、田舎者の婆さんが洋傘を引かけられて轉んだ。幸に大した怪我はなかつたが、其時自動車の内から若い西洋人がやをら立上り、小雨を厭ふて悠々と洋傘をひらいて下り立つた容子のあまりに落つき拂つたのを、眼前に見た余は、其西洋人を合せて自動車に對する憎惡を抑へかねた。自動車は其後余の嫌ひなもの、一であつた。

然るに自身乗つて見れば、案外乗心地が好い。青山から余の村まで三十分で来た。父が「一家鶏犬一車上、器機妙用瞬間行」など悪詩を作つた。工合が好いので、歸りも自動車にした。今度のは些大きく、宅の傍までは来ぬと云ふ。五丁程歩むで、乗つた。栗梅色に塗つた眞新しい箱馬車式の立派なものだ。米國から一昨日着いたばかり、全速五十哩、六千圓出たさうだ。父、母、姉、妻、女は硝子戸の内に、余は運轉手と並んで運轉手臺に腰かけた。

運轉手の手にハンドルが一寸振られると、物珍らしさにたかる村の子供の群を離れて、自動車はふわりと滑り出した。村路を出ぬけて青山街道に出る。識る顔の右から左から見る中を、余は少しは得意に、多くは羞明しさうに、眼を開けたりつぶつたりして馳せて行く。坂を下つて、田圃を通つて、坂を上つて、車は次第に速力を出した。荷車が驚いて道側の草中に避ける。鶏が刮々叫んで忙て、遁げる。小兒の肩を捉へ、女が眼を圓くして見送る。鶯々、機關が鳴る。弗々々、屁の如く放り

散らすガソリンの餘煙。後には塵も雲と立たうが、車上の者には何でもなない。あたり構はず突進する現代精神を具象した車である。但人通りが少ないので、此街道は自動車には理想的な道路と云つてよい。

豪徳寺附近に來ると、自動車は一かく入れた馬の如く、決勝點を眼の前に見る走者の如く、宛ながら眼を睜り、呷と口を結んで、疾風の如く駛せ出した。余は帽子に手を添へた。麥畑や、地藏や、眼と口を一緒にあけた女の顔や、人の聲や、眼まぐるしく駈けて來ては後へ飛ぶ。機關の響は心臟の亂拍子、車は一の砲彈の如く飄、倏と唸つて飛ぶ。

「今三十五哩の速力です」
と運轉手が云ふ。

余は痛快であつた。自動車の意志は、さながら余に乗り移つて、臆病者も一種の恍惚に入つた。余は次第に大膽になつた。自動車が余を載せて駈けるのではなく、

余自身が自動車を驅つて斯く駛せて居るのだ。余は興に乗じた。運轉手臺に前途を睥睨して傲然として腰かけた。道があらうと、無からうと、斯速力で世界の果まで驀地に駈けて見たくなつた。山となく、野となく、人でも獸でもあらゆるもの乗り越え踏みつけ、唯真直に一文字に存分に駈けて駈けて駈けて駈けて見たくなつた。硝子戸の内を見かへれば、母は眼を閉ぢ、父は口を開き、姉と妻兒は愉快さうに笑つて話して居る。

「何の位でとめられるですかね」またそろ／＼臆病風が吹いて來た余は、右手にかけて居る運轉手に問ふた。

「三間前ならトメます。運轉手は中々頭がなければ出來ません」

「随分神經を使ふですね」

「エ、然し愉快です——力ですから」

忽世田ヶ谷村役場の十字路に來た。南に折れて、狭い路を田圃に下り、坂を上

つて世田ヶ谷街道に出るまで、荷車が來はせぬか、荷馬車が來はせぬか、と余はびくびくものであつた。

世田ヶ谷に出て、三軒茶屋以往は、最早東京の場末である。電車、人力車、荷車、荷馬車、馬、さまざまの人間の間を、伶俐な自動車は巧に縫ふて、家を出て三十分、まさに青山に着いた。

余は老人子供を扶け下ろして、ホット一息ついた。

(明治四十五年 五月十八日)

デカの死

昨日隣字に知邊の結婚があつた。余は「み、すのたはこと」の校正を差措いて、鶴子を連れて其席に連なり、日暮れて歸ると、提灯ともして迎へに來た女中は、デカが先刻甲州街道で自動車に轢かれたことを告げた。今朝も奥の雨戸を開けると、芝生に腹這ひながら、主人の顔を見て尻尾振り／＼した。書院の雨戸を開けると、起きて來て縁に兩手をつき、主人に頭撫でられて嬉しさうに尾を振つて居た。正午の頃までは、裏の櫟林で吠えたりして居た。何時の間に甲州街道に遊びに往つて無慘の最後を遂げたのか。

尤も彼は此頃ひどく弱つて居た。彼は年來ビンの押入婿であつたが、昨秋新に村人の家に飼はれた勇猛の白犬の爲に一度噛み伏せられてピンをとられて以來、俄

に弱つて著しく老衰して見えた。彼は其の腹慰せであるかの如く、何處からかまだ子供々々した牝犬を主人の家に連れ込んだ。如何に犬好きの家でも、牝犬二匹は厄介である。主人は度々牝犬を捨てたが、直ぐ舞戻つて來た。到頭近所の人を頼み、わざ／＼汽車で八王子まで連れて往つて捨て、もらふた。二週間前の事である。其後デカが夜毎に歸つては來たが、晝は其牝犬を探がしあるいて居るらしかった。探がし探がして探がし得ず、がっかりした容子は、主人の眼にも笑止に見えた。其様な事で弱つて居る矢先、自動車に轢かる、様なことになつたのだから。春秋の筆法を以てすれば、取りも直さず牝犬を捨てた主人の余の手にかゝつて死んだのである。

彼は幡ヶ谷の阪川牛乳店に生れて、其處此處に飼はれた。名もボチと云ひ、マルと云ひ、色々の名をもつて居た。ある大家では、籍まで入れて飼つて居たが、交尾期にあまり家をあけるので、到頭離籍して了ふた。其様な事で彼は甲州街道の

浮浪犬になり、可愛がられもし窘められもした。最後に主従の縁を結んだのが、柏谷の犬好きの家だった。デカは柏谷の犬になつて二年経た。渡り者のくせで、子飼から育てたビンの如くはあり得なかつた。主人に跟いて出ても、中途から氣が變つて道草を喰つたりしては、水臭いやつたと主人に怒られた。雄犬の癖でもあるが、よく家をあけた。先の主、先々の主、其外一飯の恩ある家をも必訪ねた。悪戯でもして叱られると、直ぐ甲州街道に逃げて往つた。然し彼はよく主人をはじめ一家の者になづいて、假令余が彼を撲ちたくことがあつても、彼は手足をちぢめて横になり、神妙に頭をのべて鞭を受けた。其爲め余が鞭の手は自然に鈍るのであつた。彼は長い間浮浪犬として飢しい目をした故である、食物を見ると意地汚なく涎を流した。文豪ジョンソンが若い時非常の貧苦を経た結果、位置が出来ても、物を食へば額に太い筋現はれ、汗を流し、犬の如くむしやく喰ふた、と云ふ逸話を思ひ浮べて、甚可哀想になつた。其れから彼は餅でもやると容易に

食はず、熟と主人の顔を見て、其れ切りですか、まだありますかと云ふ貌をした。三つも投げて、両手を開いて見せると、彼は納得して、三個ながら口に啣へて、芝生に行つてゆる／＼食ふのが癖であつた。彼は浮浪の癖が中脱けなかつた。先の白も彼に色々の厄介をかけたが、デカも近所の鶏を捕つたりして一再ならず迷惑をかけた。去年の秋の頃は、あまりに家をあけるので、煩惱も消え失せ、既に離籍しようかとした程であつた。其れがまた以前の如く居付く様になり、到頭余が家のデカで死んだ。今朝懇意の車屋がデカの死骸を連れて來た。死骸は冷たくなつて、少し眼をあい居たが、一點の血痕もなく、唯鼻先に土がついて居た。其死を目撃した人の話に、デカは昨日甲州街道の給田に遊びに往つて、夕方玉川から歸る自動車目がけて吠え付いた。と思ふたら、自動車のタイヤに鼻づらを衝かれたのであらう、ひよろ／＼と二度ばかり顛んだ。自動車は見かへりもせず東京の方に奔つて往つて

了ふた。其容子を見て居た人は、デカを可愛がる人であつたので、デカを連れ込んで、水天宮の御符など飲ましたが、駄目であつた。
余は鶏柵内のミツクサの木の根を深く掘つて、薦に包むだま、眠つた様なデカの死骸を葬つた。

(大正二年 二月十七日)

ハムレット

帝國劇場で文藝協會のハムレットがある。芝居と云ふものを久しく見ず、評判の帝國座もまだ覗いたことが無いので、見物に出かける。

劇場の外観は白つぼく冷たく、あまり好い感じがせぬ。内は流石に綺麗びやかなものであつた。二階の正面に陣取つて、舞臺や天井、土間、貴顯のボックスと、すつと見渡した時、吾着物の中で土臭い體が萎縮するやうに感じた。

幕が上つた。十五六世紀の西洋の甲冑着けた士卒が出て、鎌倉武士の白を使ふ。亡霊の出になる。やがて丁抹王城の場になる。道具立は淋しいが、國王は眼がざろりとして、如何にも悪黨らしい。ガアツルド妃は血色が好過ぎ若過ぎ強過ぎた。緑の上衣の若者を一寸ハムレットかと思ふたら、さうではなくて、少し傍見をして

居た内に、黒い喪服のハムレットが出て来て、低い腰掛にかけて居た。余は熟々とハムレットの顔を見た。成程違はぬ。舞臺のハムレットには、幼な顔の土肥君が残つて居る。

土肥君は余の同郷、小學校の同窓である。色の淺黒い、顔の四角な、鼠の様な可愛い、黒い眼をした温厚な子供であつた。阿父が書家樵石先生だけに、土肥君も子供の時から手跡見事に、よく學校の先生に褒められるのと、阿父が使ひふるしの拂子の毛先を剪み切つた様な大文字筆を持つて居たのを、余は内々ひどく羨むだものだ。其れは西郷戦争前であつた。余等の仲間では、仲の好い同志遊びに往つたり來たり泊つたりしたものだ。ある時余は學校の歸りに土肥君と他の二三人を「遊びに來らし」と引張つて、學校から小一里もある余の家に伴なふた。遊ぶで居る内目が暮れたので、皆泊ることにした。土肥君は彼鼠の様な眼を見据ゑて、やゝ不安な寂しさうな面地をして居たが、皆に説破されて到頭泊つた。枕を並べて一寢入りした

と思ふと、余等は起された。土肥君の宅から迎への使者が來たと云ふのである。土肥君はいそ／＼起きて一人歸つて往つた。爲めに余等は甚興を失つたが、子供の事だ、其まゝ寝ついた。翌日はみやげにすると云ふて父が祕藏のシャポテンの芽をかいで、一同土肥君の宅に押しかける途中、小川で水泳して、枯れてはいけぬと云ふて砂の中にシャポテンの芽を假植したりしたことがある。其頃の土肥君は、色は黒いが少女の様なつゝ、ましい子であつた。余は西郷戦争の翌年京都に往つた。其れからかけ違つて君に逢はざること三十三年。三十四年目に帝國座の舞臺で丁抹の王子として君を見るのである。

興味は一幕毎に加はつて行く。オフィリヤは可憐であつた。劇中劇の幕の終、ハムレットの狂喜が殊に好かつた。諫言の場もハムレットの出來は好かつた。矢張王妃が強過ぎた。ポロニアスは手に入つたもの。ホラシオは間がぬけた。オフィリヤの狂態になつての出は凄く好かつた。墓場で墓掘の歌ふ聲が實に好く、仕ぐさも輕

妙であつた。

要するに帝國劇場は莊麗なもの、沙翁劇は眞面目で案外面白いものであつた。

大詰の幕がひかれたのが、九時過ぎ。新宿から車で歸る。提灯の火が映る程、街道は水が溜つて居る。

「降つたね」

「え、く。ひどい降りでした。上では雹が降つたてます」

余等が帝劇のハムレットに喜憂を注いで居る間に、北多摩では地が眞白になる程雹が降つた。余が畑の小麥も大分こぼれた。隣字では、麥は種がなくなり、桑も蔬菜も青い物全滅の慘狀に會ふた。

(明治四十四年 五月二十四日)

春の暮

庭石菖、またの名は草あやめの眞盛りである。茜がかつた紫と白と、一本二本はさしてめでたい花でもないが、午の日を受けて何萬となく庭一面に咲く時は、緑の地に紫と白の浮き模様、花毛氈を敷いた様に美しい。見てくれる人がないから、日傭のおかみを引張つて来て見せる。

草あやめの外には、芍薬、紫と白と黄の溪蓀、薔薇、石竹、嬰麥、虞美人草、花芥子、紅白除蟲菊、皆存分に咲いて、庭も園も色々に明るくなつた。

畑では麥が日にく照つて、周囲の黯い緑に競ふ。春蟬が鳴く。割葦が鳴く。蛙が鳴く。青い風が吹く。夕方は月見草が庭一ぱいに咲いて香る。

今日は雨が欲しく、風が戀しく、蔭がなつかしい五月下旬の日であつた。蟬の音、

色づいた麥、耳にも眼にもちり／＼と暑く、光る緑に眼は痛い様であつた。果然寒暖計は途方もない八十度を指した。

落葉木が悉皆若葉から青葉になつた處で、檜、松、杉、樅、椎等の常緑樹や竹の類が、日に／＼古葉を落しては若々しい若葉をつけ出した。此頃は毎日掃いても掃いても檜の古葉が落ちる。

氣輕な落葉木の若葉も美しいが、重々しい常緑樹の柄にない嫩かな若葉をつけた處も中々好い。ゆさ／＼と嫩らかな食へさうな若葉をかぶつた白檜の瑞枝、杉は灰緑の海藻めいた新芽を簇立て、赤松は赭く黒松は白つばい小蠟燭の様な心芽をつい／＼と枝の梢毎に立て、竹はまた「暮春には春服已に成る」と云つた様に譬へ様もない鮮やかな明るい緑の簑をふつさりとかぶつて、何れを見ても眼の喜である。

今夜はじめて蚊が一つぶウんと唸つた。
「蚊一つに寝られぬ宵や春の暮」

春は最早暮るゝのである。

(明治四十五年 五月二十六日)

首 夏

先日七の家から茄子苗を買つたら、今朝七の母者がわざ／＼茄子の安否を見に來た。

此頃の馳走は豌豆めしだ。だが、豌豆にたかる黒蟲、青蟲の数は、實に際限がない。今日も夫婦で二時間ばかり蟲征伐をやつた。蟲と食を争ひ、蠅と住居を争ひ、人の子もこゝさん／＼の體たらくだ。

午後筍買ひに隣村まで出かける。筍も末だ。其筍である、新竹伸びて親竹より早一丈も高くなつて居る。往復に田圃を通つた。萌黄に萌え出した苗代が、最早悉皆緑になつた。南風がソヨ／＼吹く。苗代の水に映る青空に漣が立ち、二寸ばかりの緑秧が一本一本涼しく靡いて居る。

兩三日來夜になると雷様が太鼓をたゝき、夕雲の間から稻妻がバツと射したりして居たが、五時過ぎ到頭大雷雨になり、一時間ばかりして霽れた。

裕では少し冷つくので、羅紗の道行を引かけて、出て見る。門外の路には水溜りが出来、熟れた麥は俯き、櫟や檜はまだ緑の雫を滴らして居る。西は明るい、東京の空は紺色に曇つて、まだごろごろ遠雷が鳴つて居る。武太さんと伊太さんが、胡瓜の苗を入れた大きな塵取をかゝへて、跣足でやつて來る。

最早夏に移るのだ。

(明治四十四年 五月二十七日)